

多文化共生フォーラムあいち 2010

記録集

日本人と外国人 が共に夢を持って 生きるには

日時 2010年11月28日(日) 13:00~16:00
場所 ウィルあいち 3階 大会議室
主催 愛知県 後援 内閣府、総務省

杉山 春

基調講演

夢を持っている外国人・夢を持ってない外国人
～取材を通して感じたこと～

箱崎 カリン
川口 祐有子
村上 アリセ
高木 秀近

座談会

日本人と外国人が共に夢を持って生きるには



多文化共生作文コンクール優秀作品
「みんな地球の子」「国境のない友達」

当日のプログラム

- 1 主催者あいさつ (13:00-13:05)
- 2 功労者表彰・作文コンクール優秀作品表彰 (13:05-13:15)
 - (1) 多文化共生推進功労者表彰

国際ボランティアポレポレ (半田市)
 - (2) 多文化共生作文コンクール優秀作品表彰

【優秀賞(小学生の部)】 豊田市立西保見小学校 6年 許 恵眞
【優秀賞(中学生の部)】 みよし市立三好丘中学校 3年 山田純里
- 3 多文化共生作文コンクール優秀作品朗読 (13:15-13:25)
- 4 基調講演: 杉山 春氏(フリーランスライター) (13:25-14:25)

『夢を持っている外国人・夢を持ってない外国人～取材を通して感じたこと～』

— 休憩 —
- 5 座談会 (14:40-16:00)

『日本人と外国人が共に夢を持って生きるには』

進行: 杉山 春氏

箱崎 カリン氏 (大学生)

川口 祐有子氏 (NPOまなびや@KYUBAN代表)

村上 アリセ氏 (外国人県民あいち会議代表)

高木 秀近氏 (愛知県多文化共生推進室主幹)

多文化共生推進功労者表彰

団体名	推薦市町村	活動年数 (平成22年11月現在)
国際ボランティアポレポレ (代表 青葉 孝時)	半田市	20年4か月
主な功労の内容 市民レベルで、外国人の支援・交流等の国際交流ボランティア活動を展開。知多半島全域に在住する外国人向けに、日常生活や行政手続など様々な情報をまとめた「知多半島生活ガイドブック」を6か国語で作成したほか、日本語スクールの実施などを通じて多文化共生の推進に尽力。		

あいち多文化共生作文コンクール

【優秀賞(小学生の部)】

豊田市立西保見小学校 6年 許 恵眞「みんな地球の子」

【優秀賞(中学生の部)】

みよし市立三好丘中学校 3年 山田 純里「国境のない友達」

【佳作】

豊田市立西保見小学校 6年 青木 春美「新しい発見!今、自分にできること」

知立市立知立東小学校 6年 ナカヤマ ナタリア「日本人とブラジル人が支え合うために」

滝中学校 1年 北垣 佑芽乃「二語からの出発～はじめての外国のおともだち」

刈谷市立依佐美中学校 2年 鈴木 健太「文化を受け入れる」

豊田市立保見中学校 3年 都築 知奈美「外国人だからこそ」

内容

フォーラムでは、多様化する日本社会の中で前向きに力強く生きる外国人の姿を月刊「日本語」に1年半以上連載するとともに、日本からもブラジル人コミュニティからも見えない存在になっている在日日系人の実相を描いた労作ルポ『移民環流—南米から帰ってくる日系人たち』の著者である杉山春氏に基調講演を行っていただきました。

また、基調講演の後、杉山氏が進行役となって座談会を行い、豊田市の集住地域である保見団地に暮らす外国籍の大学生、名古屋市で外国人支援を行うNPOの代表者、外国人県民あいち会議の代表者の方たちと一緒に、日本人も外国人も共に夢を持って生きていくにはどうしたらいいかを考えました。

合わせて、多文化共生のために長年ご尽力された功労者の表彰と、小・中学生から募集した「多文化共生作文コンクール」の優秀作品の紹介も行いました。

この記録集では、基調講演、座談会の記録、多文化共生作文コンクールの優秀作品を収録しました。

多文化共生フォーラムあいち 2010 記録集

CONTENTS

基調講演 02

夢を持っている外国人・夢を持ってない外国人
～取材を通して感じたこと～

座談会 14

日本人と外国人が共に夢を持って生きるには

多文化共生作文コンクール優秀作品 30

基調講演

『夢を持っている外国人・夢を持ってない外国人』取材を通して感じたこと』

フリーランスライター 杉山春

「外国人の子どもに手厚くする前に、日本人の子どもである息子を助けて欲しい」——初めて外国人の子どもたちを支援する必要性について聞かされた時、私が思ったこと

杉山です。日系ブラジル人の本を書いたところ紹介いただいたんですが、日本で暮らす外国人、特に日系人がとても大変だということを初めて知ったのは、豊田市の保見団地に取材に行った時でした。なぜ取材に行ったかというと、「月刊日本語」という語学関係の出版社が出している雑誌がありまして、そこで日本語教育についての取材をしていたんですが、当時、保見団地の中で公文教室が日本語の教室をやっているというので、その先生のお話を聞くために行きました。

ちょうど今から5年くらい前の11月くらいだったと思うんですけども、そのときに先生が、「この子たちは高校に行きたいんだけど、あの子は小学校4年生くらいのもので、この子は3年生くらいの力しかないんです」という

ことを聞いて、「あく大変なんだな」と思ったんですが、この子たちが教室に入ってくると、すぐ遊びに行ってしまったり、ブレイクダンスを踊りに行ってしまったので、本当に勉強する気があるのかな？と思いました。

私はその頃、日本で暮らす外国人の子どもが義務教育でないということさえ知らなかったんですね。ちよつとお尋ねしてみたいんですが、みなさんは愛知県の方なのでご存知だと思いますが、外国人の子が義務教育ではないと聞いてびっくりする方はいらつしやいますか？

——いらつしやらないですね。だから、当時の私というのは、多分、ここにいらつしやる皆さん以上に何にも知らなかったと思うんです。

子どもたちが義務教育でないということも知らなかったし、日本に来た外国人の子どもたちというのは、そのまま小学校に入って、中学校、高校に行つて、行きたければ大学に行つたり専門学校に行つて普通に社会に出て行くんだろうと思っていました。

だから、びっくりしてしまって、なぜ高校に行きたいのに勉強しないのかなと思つたので、その子たちに話を聞いてみました。そしたら、

さらに驚いたんですが、「ぼくはスポーツは全然得意じゃないけどサッカーで推薦をもらつて高校に行くつもり」とか、「ぼくはお父さんの派遣会社を継ぐので学校に行かなくてもいい」と言い、さらにその子は、「僕は小学校の時は成績が良かったんだけど、1年間ブラジルに行つていたらすごく悪くなつちやつて高校は行けないんだ」ということを言いました。

でもそれがすごく心配だという雰囲気もなかったんです。何か、将来についてビジョンがないという感じをすごくその時に受けました。

その同じ号の取材で、日本語教師の先生の取材もさせていただいたんですが、その先生が「これから年少者の日本語がとても大事です」というお話をされたんです。最初は、意味がよくわからなかったんですが、

「日本に来ている外国の子どもたちに教育をするためには、日本語の教育がとても大事です。

『学習言語』というものと『日常言語』というものがあつて、普通に日本語を話していても、実は勉強する力はないんです。日常言語は話せても、勉強するための学習言語をしっかり勉強しないとイケないんです。その子たちがちゃんと日本のなかで暮らしていくためには担任の他に支援をする先生が2人くらい必要なんです」と言われて、私はそこでまたびっくりしました。

1人の子どもをしっかりと育てていくためには、

あと2人くらい、生活をみる先生の他に言葉をみる通訳のような方が必要だという話を聞いて、私はその時、息子が小学校の低学年だったと思うんですけども、学校にちよつと行きにくい状況にあつて、その後不登校にもなるんですが、うちの子にもつと手をかけてくれたら学校に行けるんじゃないか、と思つていたんですね。だから、「外国人の子どもに3人も手をかけるんだつたら、うちの子に手をかけてよ」と思つたんです。

実はその後、取材をしていて、教育委員会とかが回つていると、このセリフを何度も何度も聞くんです。「うちの校区では日本人の子どもの教育も大変なんです。なんで外国人に手をかけなきゃいけないんですか。この手は日本人にしかないんです」という言い方を、本当にあちこちで聞いてきたんです。

私自身も、正直、うちの子は日本人の子なんだし、うちの子が学校に行けなかつたら困るでしょ、なんで手をかけてくれないの、という気持ちでいました。ですから、本当に意識の低い普通のおばさん、普通の人でした。社会の状況も、国が「多文化共生」とか言い出す前ですから、社会の中でもそういう意識はすごく多かったと思うんです。

「ブラジル人はしょぼい。僕は日本人になりたい。僕はブラジル人だと思われたくないから、国際教室には絶対に行かない」神奈川県愛川町で出会った小学校5年生の少年

月刊日本語という雑誌で日系人関係の取材のためにいろいろな所を回り始めたんですね。私も、私は神奈川県川崎市というところに住んでいて、そこから車で30分くらいのところに『愛川町』という、そこはペルー人が比較的多いんですけれども、外国人が集住して工場団地で働いている町があつて、そこに何度も取材に行きました。

のちほど、町役場でブラジル人通訳のアドバイザーをしたり、保育園に初めて入ってきたお母さんの支援をしたりしていらつしやる日系ブラジル人で40代後半の岩根美智枝さんという方の話を詳しくしますけれども、その方が、ブラジル人の子どものための母語教室と日本語教室をやつていて、その教室に取材に行くと、小学校5年生の男の子がいたんですね。

岩根さんが間に入ってくれたので、結構日本語でいろいろ話をしてくれました。だから、多分、比較的本音が出たと思うんですけれども、そのうちにその男の子が、

「ブラジル人はしょぼい。日本人に僕はなりた。僕はブラジル人だと思われたくないから、

国際教室には行かない。絶対に行かないよ。日本人じゃないとばれたらいやだ」

ということを一生懸命話してくれました。そばにいた別の男の子も、「僕も絶対国際教室には行かない」と言つたんですね。

私は、その話を聞いた時に、なんとなく、ブラジル人の子どもたちの心の中にあるものがわかつた気がしたんです。

自分が自分であることを人に伝えたくない。自分にとって、今、本当に必要なのは、多分、国際教室で人に助けってもらつて勉強すること。だけど、自分のことを人に言いたくない。自分のことを隠しておきたい。だから、必要なものに手を出せない。そういう気持ちを、何かわかつた気がしたんです。

私は日系人のことだけを取材しているのではなく、今から6年くらい前に『ネグレクト』という本を書いています。このために愛知県にはよく取材に来ていて、公判にも25回くらい通つたんですけれども、2000年に愛知県半田市の隣にある武豊という町で、21歳のお母さんが3歳の子を箱に入れて餓死させたという取材をしています。ネグレクトをしているお母さんというのは、うまく育たない子どもがいると、その子を人に見せてもいい状態の時は見せに行くんですが、その子が具合が悪くなつて、「あなた何してたの。お母さんでしょ」と言われてし

まうと、気持ちが悪えてしまう、自分が自分で子育てをしていることを人に見せられなくなっていく時に、実は、ネグレクトというものは起きています。

それから、引きこもりの取材もしていて、今年の夏ごろに週刊朝日で3回くらい連載したんですけれども、長期化する引きこもりというところで、30年くらい引きこもっている方の取材をしました。これもやはり名古屋で、なぜかしら名古屋でそういった取材をすることが多くて、こちらにはよく来ています。今、社会に出て行けない若い子たちが実はとても多くて、そういう子たちのための自立支援のためのサポートが制度化されてきています。そういった場所の経験取材みたいなことを東京の吉祥寺の方でしていて、そういった子どもたちとブラジル人の子どもたちの抱えている問題の根っこは、もしかしたら同じかな、とこの頃思っています。

つまり、自分が自分であるということが認められない。自分が、この社会にいていい、ということが認められない。そういう気持ちの中で、日系ブラジル人の子どもたちが抱えている問題と、引きこもっている人たちが抱えている問題と、ネグレクトの問題は同じなんじゃないか。夢が持てるというのが今日のタイトルなんです。自分が社会の中でちゃんと生活していつて安心して生きていつていいよと思えることが、

私は大きな意味で、夢を持っているということ、そこから大きな夢、小さな夢、いろんな夢があると思うんですけど、まず、この社会の中で、私は生きていいんだよと思えることがすごく大事なことで、人間が生きて行くためにすごく大事なことだと思っています。

今、大阪で今年の夏に起きた2児がなくなつた事件の取材も続けている最中なんですけれども、そういうのをやっていて、どんどんどんどん私の中で、ブラジル人だから、外国人だから夢が持てないというのではなく、自分はこの社会の中で生きて行く方法があるか、あたり前の自分を人にお伝えして、人と付き合つて生きて行くことができるか、ということがすごく大きな問題なんじゃないかなと思っています。

「20歳のとき、僕の未来は真つ暗闇だと思つていました。今、毎年、10人ぐらいの（外国人の）高校生と関わっています。そのうち、95パーセントは大学に進学しています。どうして、わざわざ大学に行くの？」と聞くと、お前のような生き方をしたくないからと言われますよ」具志アンデルソン飛雄馬さん（31歳）——三重県松阪市の国際化対応指導員
特定非営利活動法人 多文化共生NPO世界人代表

私はそのあと、『移民環流』という本を書きました。2年前に出した本で、今日のテーマとは合わないと思うんですけど、とても暗い日系人社会のことを書いています。

愛知県というのはすごくいろんな手を打つてきているので、私が取材をしてきた頃とはかなり変わってきてはいると思いますが、日系ブラジル人コミュニティが、明るくてきちんと秩序立っているとは思っていません。

保見団地で暮らしている女の子で、14歳くらいで妊娠して、そのあと、3人子どもを産んで、覚せい剤で逮捕されたという女の子の取材をしたり。もう離婚していますけれども、その旦那さんも逮捕されていて、彼は、ブラジルのボンタポランというパラグアイの国境沿いの町から来ていたので、そこまでご家族に会いに行つたりとか、そんな風にして取材をしましたけれども、率直に言つて、日本で暮らす外国人の、特に日系人のコミュニティというものが、とても明るくて希望に満ちている世界には私には見えません。ちゃんとしっかり生きていらつしやる方はいっぱいいらつしやいますけれども、自信が持てなかったり、社会の中にうまく出て行く道が自分で見つけれない人たちが、まだまだいっぱいいると思っています。私が取材を始めたのが5年くらい前なので、古い話なのか

も知れませんが。

ところで、私は、「20歳のとき、僕の未来は真つ暗だと思っていた」という具志アンデルソン飛雄馬さんという方を取材しました。彼は、三重県の松阪市で今、国際化対応指導員というのをしていたり、『多文化共生NPO世界人』代表ということである講演活動をしてらっしゃる方なんですけれども、ものすごく激しいイジメに遭っています。

日系人の社会の取材の中でイジメの話に出会わないことはなかったです。『移民環流』の取材をした時に、ブラジルに行ってきたが、ブラジルで日系人を受け入れている学校の取材をすると、あまりイジメの話は出てこないんですね。でも、例えば愛川町で取材をした時も、ある女の子が転校してきて、言葉がわからなかったんですが、その時小学校4年生の友達から、「一緒にお風呂に入ろう」と性的なからかいを言われた。そういった話をすごくいっぱい聞くんですね。

さっきの小学校5年生の男の子が、なぜブラジル人はしょぼいと思うかというと、もちろん、お父さんたちの仕事の問題もあると思うし、イジメの問題があるかも知れないし、いろんな問題があると思うんですけれども。例えば、この具志さんは、11歳で来日して、工場労働をするご両親の下で津で暮らし始めました。20年くら

い前で、津で一番最初のブラジル人の工場労働のお父さんだったといえます。この子は今30歳なんですけど、帰り道にいじめっ子にトイレで殴られたり、暴力をふるわれるのは当たり前だったと言っていました。

ただ、それよりも辛かったのは、クラスの優等生と言われる子どもたちが違う生き物を見るように自分を見るのがとても嫌だったと言いました。それから、本国で勉強して点数がとれたのに、日本に来て勉強ができなくなった。頭が悪いわけではないんですけれども、言葉ができなくて、支援がないとテストの点がとれない。それがとても嫌だった。彼だけでなく、勉強ができなくて嫌だったと語る子にもとてもたくさん会いました。

それから、この子の場合には、家族6人で買い物に行くときは、スーパーの駐輪場で何を買うか話し合ってから、スーパーの中で黙って家族で買い物かごの中に詰めたといえます。彼はものすごく立派な伊勢弁をしゃべるんですけれども、自分が完ぺきな日本語を身につけたのは、日本語さえ身につければいじめられない、他の子から区別がつかなくなればいじめられないと思っただけだといえます。

日本人と同じように見えたらイジメられないんじゃないか。彼の場合は、日本から行ったお父さんとお母さんの間のお子さんで、外国人の

血が入っておらず、みかけはわからないので、そういう風に思ったと言います。「この子は多分、すごく力があつたお子さんだと思うんですが、それが日本の中で認められなかった。そうするとどうなっていくかというと、非行の方に行ってしまうんですね。

中学から高校に入る時に、ドロップアウトをして、暴走族になります。彼は暴走族時代は自分がブラジル国籍だということは一切消して、日本人と同じ人間だという風にして5年間暴走族時代を過ごしました。もしかしたら具志さんの話を聞いたことがある方がいるかも知れませんが、私なりの感覚でお話をします。それで、日本人の中に入って生活をするんですが、19歳の時に傷害事件で保護観察になりました。この時期に、「ヤクザの構成員になるしかない」とヤクザから言われて、その時に思ったのは、「自分はヤクザになりましたかかったんじゃない、自分の力を試したかったから暴走族をやっているんだ。いつの間にか気が付いたら自分の将来は真つ暗闇だった」と言いました。

私、実は、自分の将来が19、20歳で真つ暗闇だったという外国人の青年たちにあと2人くらい会っているんです。もう一人の青年は、今27、8歳だと思うんですけども、この子もすごく力のある子なんですけど、日本の中に支援策が全然ない時期に入ってきていて、学校と反りが合わ

なかった子なんですけれども、この子も日本語をすごく上手に話すんですね。すごく早い時期に日本語を身につけています。彼がなぜ日本語を身につけたかと言うと、この子は中学1年で来ているんですが、喧嘩っ早い子だったそうです。何を相手が言っているかわからないうちに、向こうが攻撃的な格好をすると、自分の手が出て相手を殴って問題になる。だから相手の言葉がわからないと困ると。

日本語ができれば日本の社会に入れるわけではない。日本の社会の中にうまく入っていけない子、日本の社会の中に居場所がない子というのは、力があると、どうしても社会から見えない方向の力に引っ張られていきます。それは、彼らの能力をそちらの方の社会の人たちがすごく早く見抜いて、使っていくためなんです。この子は、茨城県辺りに住んでいる子で、荷物を運ぶと一晩で700万円くらいのお金になったという仕事をしているので、一体何をしていたのかなあと思います。

彼の未来を本気で気にしてくれたのは、刑事さんだった。刑事さんしかいなかった。彼は窃盗もやっていたんですけど、「お前がやっているのはわかっているが、お前みたいに証拠を残さないでそこまで見事にやれる人はあまりいない。お前くらい力があつたら違う方へ使つたらいい」とその刑事さんに言われたといいます。

具志さんや、この青年の周囲には、大人がいないあつていうことをすごく思います。周りに大人がいないままに育っている。日本語はできる。だけど社会に対して信頼を持たせてくれる大人がいない。大人に対して信頼ができないまま育つているとすごく思いました。

先ほど愛川町の話をしたんですが、愛川町の教育委員会の方は、「こういう子たちを高校に入れない。それは将来のためということもあるけれど、高校に入れないと、この子たちと対話できる日本人の大人がいない。この子たちにはちゃんと日本側のメッセージを伝えるためにも、ちゃんと社会の一員にしないといけない」と言っていました。

日本の日系ブラジル人の社会というのは、核がない、コミュニティがない社会だと私は思います。3、4年くらい前に、集住する町の中学校の校長先生は「外国人の親御さんたちについてうのは、どうしてコミュニティをつくらないんだらう。日本人だったら例えば外国に行つて、何かそれだけの人が集まったら何かするだらう。集団になるだらう。あれはブラジル人たちの文化なんですようかねえ」と私に言いました。

でも、私は、ブラジルのポインタプランという、犯罪を犯した青年のふるさとまで行っているんですが、そこご家族たちは、とても立派なコミュニティの中で暮らしていました。ちゃんと

町であつたらあいさつをして、日常会話をしてお互いに困ったことがあつたら助け合っていました。それから、その青年が日本で、10代のときにつくった子どもたちを親族が一生懸命育てていました。そこでは、今日は誰々が子どもを迎えに行くから、誰々が店番しててね、とかそういうコミュニケーションをとりながら立派に生活をしてらっしゃった。バラバラで生きるのがブラジル人たちの社会の文化ではないんですね。

なぜそういうことが起きるのかと言うと、これは生活の在り方でしょう。日本人でも同じような生活、つまり、何の権利も見えなくて、言葉もわからなくて、ただ働くだけであれば同じようになると思います。リーマンショック以後、ずい分変わってきてますが、特に私が取材した頃は、派遣労働がすごく盛んな時期でした。そうすると、集まってくるブラジル人同士が、そこで初めて会う人たちなので、少しでもお金のいいところで働きたいとか、少しでもいい待遇を得たいとか考えるので、競争社会になっていきます。それと、雇う側の都合に従ってどんどん移動していきます。お互いが競争する社会の中では人はつながれないし、新しい良いものをつくっていくことができなくて、今まで持っていた大切なものを、どんどんどんどん失くしていく方向でしか生活ができないんだということ

を、私はブラジルまで行ってはつきり気がつき
ました。

先ほど虐待をしているお母さんたちの取材を
していると言いましたけれども、日本の中で虐
待をしているお母さんたちや、いろんな困難を
抱えている人たちが、やっぱりお互いがつな
りあえない。お互いを信頼し合えないんです。
だから、今、日系ブラジル人のコミュニティの
中で起きていることというのは、日系人だから
そうなのではなくて、社会の仕組みの中で、そ
ういう関係性しか持てない中で生活をしている
からなんです。

サンパウロ市のヘジストロという町があつて、
私の父が国際協力事業団の専門家で行っていた
時に私も行っていたことがあるんですが、その
町のうち、多分3分の2くらいの人は、一回は
日本に来てはいるんですね。その人たちと向こう
で会えば、本当にしっかりと人たちは。地
域にコミュニティもつくっているんですが、そ
ういう人たちが日本に来ると本当に関係性が壊
れてしまう。

話が飛びますが、カエルプロジェクトという
日本からブラジルに帰った子どもたちを支える
活動をしている方が、この間日本に来て、いろ
んな集住地域を回ってブラジル人の方の相談に
乗っていらしたようなんですが、その関係者に
聞くと、やはり今でも日本のブラジル人コミュ

ニティの中の関係性はすごく悪くて、不倫があ
つたり、家族がすぐ崩壊してしまつたりする状
況が今も続いているそうです。そういうことを
『移民環流』の中では書いてあるんですが、そ
れは決してブラジルの人たちだからではなく、
誰でも競争社会の中に投げ込まれて、権利を奪
われて生きていくとそうならざるを得ないんで
す。

先ほどの小学校5年生の男の子が「ブラジル
人はしょぼい。僕は日本人になりたい」と言っ
ているのは、日本の中で安心して暮らしている
日本人の方がよく見えるからそう言っているん
だと思うんです。引きこもっている青年たちは、
自分に対して自信がないので、例えば、私が会
った人は、お屋さんで働く訓練をするのです
が、お屋さんへの入り口に立っていて、いらっ
しゃいませと言いうことができない。日本人の男
性です。言えない。なぜ言えないのかというと、
僕なんか人に、いらっしゃいませと言ったら、
皆が嫌がるんじゃないかという感覚を持ってい
る。だからいらっしゃいませと言えない。日本
語が話せても、社会の中に入っていくというの
は、自分がここにおいて、皆が自分があることを
喜んでくれるということを知っていることが
すごく大事なことだと私は思っています。

「大学で移民を扱う『国際人口移動とエスニ
シティ』という授業に出て、衝撃を受けまし
た。自分たちのことが扱われていると。父が
私に厳しかったことも、祖母がブラジルで生
活をしながらなぜ、日本にこだわっていたの
かもよくわかりました」柳瀬フラヴィア智恵
美さん（23歳）——国際基督教大学卒業後、
現在、カナダ・ヴィクトリア大学修士課程

柳瀬フラヴィア智恵美さんという方の話をし
ます。彼女もすごくイジメに遭っていたようで
す。この方は静岡県の方です。小学校の頃イジ
メに会って、どんなイジメに遭ったのかインタ
ビューをしたら、言いたくないというか、覚え
ていないと言われました。「イジメは全部蓋し
ているから覚えていないんです」とおっしゃっ
ていました。それでも、キモいとかいるんなこ
とを言われたとは思いますが言っていました。

彼女の場合は、お父さんもお母さんも勉強し
なさいと言うすごく厳しいお家だったそうです。
お父さんは大学へ行けと言ったそうです。彼女
が住んでいた地域のコミュニティでは、大学に
行く人はほとんどいないし、高校に行く子もい
ないという環境の中でした。そうすると、高校
に行くため、大学に行くために勉強しているこ
とが、今度はコミュニティの側の、日系人の
子どもたちから排除されるという状況になった

と言います。なぜそんなことをするのかと言われて、一緒に遊べなかった。彼女が一番話しやすかったのは、日本人でドロップアウトして非行に走っている子たちだったと言っています。

彼女はアメリカの音楽グループがすごく好きで、中学校の3年間で、その人の歌詞をひたすらポルトガル語と日本語に訳していたと言います。そうすると、英語の力がすごくつき、お母さんがすごく熱心に、英検を受けなさいと彼女に言ったので、中学を卒業する時点で2級をとっていた。英検2級というのはすごいですよ。それぐらい英語を勉強していると、他の科目の成績もそこそこ良くなって、当時、静岡県には外国人の子どものための枠がある高校があったんですが、そこに進学をします。

中学時代のエピソードがもう一つあって、お友達とはうまくいかなかったけれども、副校長先生がすごくスポーツが好きで、日本人の子もブラジル人の子も全く差別しないで校庭でよく遊んでくれたと言います。差別をされないうで先生に相手をしてもらったのが一番嬉しかったと言っています。

るんですが、そうなるためのサポートをこの子にすごくしてくれたみたいです。

周りは、とにかく大学に行きなさいと言い、校長先生を始め学校が一丸となって、この子がどの大学に行けばいいかを考えてくれて、このフラヴィアさんは、国際基督教大学に行きました。彼女は、日本にいるブラジル人の子どもたちに日本語を教える先生になりたい、言葉を教える先生になりたいということで、大学に行きました。高校時代に6時間くらい毎日勉強をしながらアルバイトをしてお金を貯めていたとも言いました。

私は大学に進んだ日系人の子たちに何人か会っています。多分、5、6人くらいかも知れないですけれども、2つに分かれるなと思っていて、1つは、言葉がわからずに10歳前後で来て、ものすごく支援を受けて、いろんな人に助けてもらって、大学まで行った子です。その子は、大体お家の人たちがすごくサポートしてくれて、言葉はわからなくても、いろんな意味でサポートして勉強をさせているお家の子で、親が一生懸命関心を持っています。

もう一つは、もうちょっと小さい時に来ている子が多いと思うんですけれども、意外と早い時期に成績が良くなって、日本人の子どもに混ざってしまっていて、学校側からは姿が見えないような状態で、勉強ができて上がっていく子

です。集住の町ではなくて、バラバラに暮らしている町などに何人かいるみたいです。私がかいた子は、ペルー人の子なんですけれども、ペルーに1回戻って、ペルーもいい国だなあと思って日本に帰ってきている。自分の出てきた国、関係のある国がいい国だどこかで思っていて、そんなに恥ずかしい国じゃないよ、いいところが、いっぱいあるよと思って帰ってきた子たちが、そのまま自然に、自然にでもないですけど、それなりにがんばって、そこそこ名前のある学校に進学していきました。そういう子たちに会っています。

私がフラヴィアさんの話をしたいなと思ったのは、資料にも書いてあるんですが、「大学で移民を扱う『国際人口移動とエスニシティ』という授業に出て、衝撃を受けました。自分たちのことが扱われていると。父が私に敵しかったことも、父方の祖母がブラジルで生活をしながら日本にすごくこだわっていたこともなぜなのかよくわかりました」と言っています。フラヴィアさんという方は私の『移民環流』という本を読んで、ものすごく熱烈的なラブレターのような読書感想文を送ってくださいって、「自分のことが初めて書いてあった」と言ってくれたんですけれども、自分が誰なのかがわかるというところが、ものすごく大事だなとフラヴィアさんの手紙を見ながら改めて思いました。

言葉が話せれば日本の社会に入れるということではなくて、繰り返しになってしまうんですけれども、自分がどういう歴史の中で、どういう社会の仕組みの中で、今、ここに生きているのかということを知ったことが、彼女のものすごい驚きであり、また、前へ進んでいく力となっていたわけなんです。

彼女は8歳で日本に来ているんですが、ものすごく日本語も勉強し、英語も勉強し、国際基督教大学に試験で受かるくらいの力があるんですが、大学に入ってやっぱりすごく大変だったと言います。日本人の学生が2、3日で書ける論文が自分は1週間もかかる。しかも大学に入ると特別の支援がない。外国人だからという支援がもうない。初めて会った時には、教授に、あなたの語学力では研究職は無理ですよと言われて、がっかりしていた時期だったんですけれども、それからまた勉強して、今はカナダの大学で修士として勉強しています。

彼女は、どこにでもこれと想ったところにはどんな声をかけていて、ブラジル人の権利のことについてもいろんなことをメディアでかなり発言していたと思います。自分がここにいる理由。なぜ自分がここに生きているのかというのがわかるということが彼女にはすごく力になったと言っていました。

でも、それは、実は私自身もそうだったなと

思います。私がなぜ本を書いているのかというと、自分がなぜここにこうして生きているのかとか、どの歴史のほずれに自分が存在しているのかとか、じゃあこういう自分だったら次は何をしたらいいのかというのは、やはり、いろんな事を考えたり、情報をとったりして初めて自分の力になり、次は何やってみようと思えるようなことがあるので、これはフラヴィアさん独特のことではなくて、ごくごく誰にでもあることだと思っんです。

具志さんに話を戻しますと、彼は非行少年だったという話をしたかったわけではなくて、彼なんかは非行少年で気持ちが悪かったんですけれども、彼の場合は、その時にお父さんが亡くなって、息子の姿をすごく嘆いて亡くなったということを知って、一念発起をしました。中卒だったんですが、松阪市の教育委員会に、外国人の子どもを支援をする仕事がしたいと直接言いに行つて、あまり熱心に言われたので、教育委員会から、ちよつと手伝つてと言われているうちにいろんなことができるようになったと言っていました。

彼は夜間高校の外国人生徒の指導員をしているんですけれども、高校に関わるようになって初めて「人権」という言葉を知ったと言います。彼は、僕は日本の国に来ているんだから、そいつと生きて行かなきゃいけない、不利な立場な

のは当然だとそれまで思っていたんだけど、そうではなくて、日本の中でもちゃんと生きていいんだと分かった時にすごく驚いたと言っていました。彼は人権活動を三重県で一生懸命して、県議会で、外国人に対しての支援をする多文化共生のできる県にしますよというような議決をとるための署名活動をしたりとか、ドラッグストアで差別的な扱いを受けたときに、会社へ子どもたちを連れていき、「それはおかしい」と言いに行ったりしています。

三重県の松阪市というのは同和問題に非常に熱心なところなんですけど、市とか、警察とか、そういう人たちと一緒に、おかしいと言っている時に、ドラッグストアの方が「申し訳なかつた」と子どもたちに謝りました。そうしたら、その子どもたちはすごく元気になって、例えば、彼は10人くらいの子を毎年みているんですが、その年の子は9人まで大学に行つた、と彼は言っていました。なんで大学に行つたの?と聞いたら、資料にも書いてありますが、「今、毎年、10人くらいの高校生と関わっていますけど、そのうちの95%は大学に進学しました。どうしてわざわざ大学に行つたの?と聞くと、お前のような生き方をしたくないからですよとわれまますよ」と言っていたんですけれども、そういう風に、自分はここの社会の中でちゃんと生きる権利があるとわかって、社会のルールに従って自

分の権利を行使できるということは、子どもたちにものごい力になるといことを話してくださいました。

「私は日系人にも、町や教育委員会、企業、日本人の親御さんに対しても、言う必要のあることは言います。それができるのは、日本人のボランティアなど、周囲の人が私を信頼して支えてくれるからです」岩根美智枝さん——在神奈川県愛川町 ブラジル・通訳アドバイザー 町役場の窓口や学校で相談業務

次は、先ほどお話しした岩根美智枝さんについてです。この方は、神奈川県愛川町の役場や学校で相談業務をしているんですけれども、多分、日本の中で、役場の窓口でこうした仕事をする草分け的な方です。この方も愛知県に来て話したことがあると言っていました。彼女の場合は、例えば保健所から予防接種のカレンダーをつくってほしいと頼まれると、ブラジルまで連絡を取って、予防接種のカレンダーがブラジルではどうなっているか、どういう仕組みになっているかということを知り、それを踏まえながら日本のカレンダーをつくりまします。

この人の情報収集力というのはものすごく、わからないことがあると、保健所にも行きます

し、ブラジル大使館にも行きますし、会社にも行きますし、病院にも行きます。どこにでも入って行って、情報をしっかりとってきて、正確な情報を町の人たちに伝えていきます。

なぜ彼女が情報をしっかりとってこられるかと言うと、彼女の場合は日本語力が高いからです。ブラジルには日本語学校がありますけれども、ブラジルにいた時に、6歳から18歳まで、つまり義務教育から高校の期間、ずっと午後6時までの学校に行くと午前9時の日本の学校に通うというダブルスクールみたいな感じで通っていた人なので、情報をとるのがすごくうまいです。

彼女がブラジル時代にどういう思春期を過ごしていたかと言うと、ボランティアをすごくやっていたんですね。それから、子どもたち同士で一緒に遊びに行ったり、いろんな社会的な活動をしていました。ブラジルの文化なのか日系人の文化なのかわからないですけども、社会的にいろんな活動をするということが意味のあることで、大切なんだということも10代の頃にもものすごく学んで日本に来た方です。

だから、彼女はブラジルの文化を日本に持ってきてくれた人だと私は思っているんですが、日本の中でいろんな問題が起きた時に黙ってられない。何かやらなくちゃと思う。うまく表現できませんが、すごくしっかりした人です。

こういうしっかりした人たちというのが実はブラジルから何人も何人も来ているんですね。

「日本人とブラジル人の心に違いがあるとは思いません。相手の立ち場や気持を理解して、マイナス点も分かかって、解決方法を探って行く。世界は私たちが想像しているよりもずっと広いと思います」野川明美さん——NPO法人「大庭相談所」理事長 名古屋市内でホームレスへの炊き出しを15年。ブラジル人支援も行う

もう一人ご紹介したいのが野川明美さんです。この方は、NPO法人の「大庭相談所」というのをやっていて、ブラジル人の支援などをすごくしていらつしやいます。私がなぜこの方と知り合ったのかと言うと、先ほど、ブラジルのポインタポランまで取材に行ったと言いましたが、犯罪を犯した青年たちのお母さんの取材をしていたんですが、そういうデリケートな取材をしていると、局面が変わってくると、突然、取材拒否になるんですね。

日本人同士だと、取材拒否になっても、一生懸命言葉をつくしたり、手紙を書いたり、謝ったり、態度で示していると、信頼関係が一回壊れかかっても、なんとなく紡いでいけるので、

取材はやっていけるんですけど、外国人の取材がすごく大変だと思ったのは、何か行き違いがあった時に、こちらは悪気はなかったけど、向こうでものすごく悪くとられたりとか、どうしようもなくそうしてしまったりとか、いろんな細かい事情の中で行き違いが起きた時に、パーンとシャツターが下りるみたいにそれまでの関係が壊れてしまう。そうなると、これまで取材してきたことができなくなったりとか、場合によつては書かないでくれと言われたりしてしまふ。そこをなんとかつなげていくのが外国人の場合はものすごく大変で、これが異文化の壁かなと私は思ったんです。

外国人の方に間に入ってくださいと頼んでも、間に入ってくださいの方が大体、「駄目です。それは無理です」とおっしゃるんですが、この野川さんという方がすごかったのは、そういう状態になった時に、彼女はなんとかつないであげると言つて、間に入ってインタビュを成立させてくれたんです。この人すごい人だなあと思つて、野川さん本人にもインタビュをさせてもらったんですね。

インタビュに行つてみて驚いたのは、彼女は、名古屋のテレビ塔の下で2週目と4週目の土曜日の夜、日本人のホームレスに炊き出しをしていました。日本人のホームレスに対して支援を始めて16年になるといいます。彼女は20年

前に日本に来て、来た時には日本語がほとんどしゃべれなかった人です。私が見に行った週は、朝2時半に起きて千個のおにぎりをつくり、350人分くらいの豚汁をつくっていました。それを手伝っているのが、実は日本人のホームレスだったり、日本人の引きこもりの少年だったりするんですね。現場に行くと、ブラジル人の人たちも来てお菓子を配っていたりしていました。

調べてみると、日本国内でブラジルの方が日本のホームレスに炊き出しをしている場所が3か所か4か所あるみたいなんです。私は全然そういうことを知らなかったんですが、ブラジル人のメディアでは比較的有名なことのようにでした。彼女も言葉が話せない中で、一生懸命日本人のホームレスの話を聞いているうちに、彼女自身も変化していつて、日本人もブラジル人もあまり変わらない、ということを感じ始めたようでした。「日本人とブラジル人の心に違いがあるとは思いません。相手の立場や気持ちを理解して、マイナス点も分かつて、解決方法を探っていく。世界は私たちが思っているよりもずっと広いと思います」ということをインタビュの中でおっしゃっていました。

彼女は、日本の行政から「このホームレスは病院に入った方がいいんだけど、汚くてそのまま入れられないからお風呂に入れてあげ

て」と頼まれると、彼女の施設の中でお風呂に入れてあげたりしています。そうかと思うと、ブラジル大使館が、日本で精神を壊してしまつたブラジル人を本国に連れて帰りたいので手伝つてほしい、と言われると、その人と一緒にブラジルに帰つたりします。

彼女は本当に普通の人で、でも、やっていることはすごく、「ホームレスという方たちは食べ物が必要なんじゃないんです。人が信じられる、信頼しあえる関係がほしいんです。それがあれば彼らは動きだせる」と言います。

彼女は月に2回ほど、ホームレスの人たちと一緒に勉強会を開いています。ホームレスの人たちに、あなたは働かなきゃいけないとか、こんなことをしていちゃいけないとか、家の中で暮らしなさいと言つても、それはできません。だけど、一緒に勉強しながら、お互いに信じられる場所があることがわかると、少しずつ変わります。彼女と一緒に勉強会をした人の中には、新聞の配達員として住み込みで働き始めた人とか、それまで絶対に生活保護を受けないと言つていた人が、行政の保護を受けて、屋根のあるところに住めるようになったとおっしゃっています、本当に彼女を見ていると教えられます。

「私は3年間高校のPTAの広報委員でし

た。1、2年では『佐藤信子』でしたが、委員長になった3年目は『佐藤リリア』にしました。自分がブラジル人だとわかってほしかったからです」佐藤リリアさん——2004年から2006年まで川崎市外国人市民代表者会議の委員を2期務める。

この佐藤リリアさんも20年くらい前に来られています。日本の中で比較的安定して社会的な活動をしているブラジル人の女性に会うと、たいてい20年くらい前に来ています。彼女たちは、どちらかというところ、旦那さまが正社員として来た人たちです。派遣で来るようになる前、日系人の人たちが正社員として会社に入れていた時期に来た方たちが多いです。そういう方たちが、自分たちの持っている能力を使って、通訳をしたり、日本の中で外国人の子どもを助けたりという仕事をしながら、いろんな形で力をつけてきていると思います。

20年経つてものすごく社会の中で力をつけていると思うんですが、佐藤さんは日本に来たとき、自分はブラジル人であることが恥ずかしかったと言っていました。工場でも働いたのですが、ある時期は、絶対に自分がブラジル人とわからないように、しゃべらないとか、そういうことをしながら過ごしていたそうです。

ところが、今から10年くらい前、ブラジルに

いるお父さんとお母さんが日本に来た時に、知り合いがいるからと連れていかれた人が、川崎の方で外国人の子どもたちに母語教育をしているグループの代表をしていたんですね。その方に、子どもたちを助けてと言われたので、一緒に活動を始め、医療通訳をしたりとか、自分のできる範囲のボランティアをだんだん始めていくんですね。

そうすると、彼女はこれまで10年間閉じこもったように生活をしてきたと言いますが、いろんな情報が自分の中に入ってきたと言います。いろんなことができることを知った。パナソニックの支援を受けて子ども向けの教科書をつくらしたりする中で、いろんなルートを使うと、社会の中で自分たちができることがいっぱいあるということ为先輩の女性から教えられるんですね。

川崎には川崎市外国人市民代表者会議というのがあります。これは、26人の委員が2年ずつの任期で行う会議です。外国人市民代表者会議といっても、中国代表とか、ブラジル代表とかいうことではなくて、「外国人代表」という形の会議なんです。外国人の子どもの教育のことが大変とか、これをこうしてほしいとか、そういうことを、調査して、皆の声を吸い上げて、どういうことをしたらいいかということをして市に答申します。そうすると、市はそれを受けて、必ずそれに対して現実的な回答をして、施策に

反映させていくという仕組みがあります。2年ごとに点数評価してどこまで達成できたかというところまで評価するような活動なんです。そこに、彼女は、社会的に活動を始めて4年目くらいから、その会議の中に参加していくんですね。そうすると、一生懸命調べた意見がちゃんと社会の中で反映されるということをやっているんですね。大事なことはちゃんと通じるし、社会もそれが大事だとわかれば変わってくれるということをやっています。

彼女は日本語はあまりできません。私が書いた原稿を横で読み上げながら、これでいいかなんかでないかわからないくらいの読み書きなんですけれども、息子さんが高校に入った時に、PTAの広報委員の成り手がいないからということや広報委員をしました。広報委員を3年間やって、3年目には「広報委員長」になってしまいましたが、「委員長できたの？」と聞いたら、「写真の多い広報になっちゃいました」と言っていました。「原稿はみんなが書いてくれた。でも本当は書きたいことがあるから書きたかった」と最後に言っていました。

私は、彼女に出会うまでは、子どもたちの日本語教育がすごく大事だと思っていました。子どもたちにまず日本語の力をつけ、社会の情報を与え、自分で情報をしっかり受け止めて、それを自分に活かしていく能力のためにも、日本

語はすごく大事だから、これから生きて行く子
たちにはまず日本語を、と思っていました。

彼女は見た感じ、普通の方ですが、彼女がこ
んなに変わったという話を聞いて、すごいと思
いました。野川さんという方もすごいと思うし、
いろんな方をすごいと思うんですけども、ご
くごく普通の人でも、機会があつて、何かをや
つて、それで周りのいろんなものが変わってい
くということを知った時に、すごく変わってい
く。彼女は、自分がブラジル人だということ
ちやんとわかつてほしいから自分の名前を名乗
ると言った。自分の名前を名乗るといのはす
ごく大事なことで、フラヴィアさんも大学生に
なつてフラヴィアという名前をつけます。やは
り、自分が誰かということをきちんと人に見せ
て生きていける社会になることが、私は人が夢
を持つて生きることとすごくつながっているん
じゃないかなと思つています。

**外国人と日本人がともに夢を持てる社会を作
るために**

今、私はどちらかというと日系人の取材とい
うよりも引きこもりの取材と虐待の取材、ネグ
レクトの取材とかを続けていますが、日本の中
で、自分が自分ですと言えない子たちがすごく

多いことにびっくりしています。これは、外国
人だけの問題では全然なくて、例えば、今年の
夏に内閣府は、引きこもりが大体70万人で、予
備軍が155万人という数字を出しました。自
分が自分であるということ世の中に証明でき
ない、示せない子どもたちがこれだけいる。そ
のほかにいるんなノイローゼの子どもたちもい
るし、本当に子どもたちの育ちが大変な時代で
す。この中で、日系の子どもたちだけでなく、
外国人の子どもたちが、私は私ですと言つて生
きていける社会になるということは、実は、日
本のこれだけの苦しんでいる子どもたちが楽に
生きられることとつながっていると私は思いま
す。

だから、私は最初に、自分の子どもにもつと
手厚くしてよ、先生いっぱいつけてよと思つた
けど、自分の子どもにも手厚くしてほしいんだ
けれども、でも、一緒に生きて行く仲間たち、
日本に暮らしている外国人の子どもは日本で暮
らしていく仲間ですから、この子たちにも手厚
くしてよ、つまり、子どもにしっかり目をかけ
て、子どもをよく見て、子どもたちをよく育て
て——。これが、私たちの未来だと思ふ。夢だ
と思ふんですね。そこが一番大事なことだと私
は思つています。

ちよつとつたない話で申し訳なかつたですが、
時間が来たのでここまでにさせていただきます。

どうもありがとうございました。



杉山春氏プロフィール

1958年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。雑誌編集者を経て、フリーライターに。著書に、『ネ
グレクト 育児放棄—真奈ちゃんはなぜ死んだか—』（小学館。第十一回小学館ノンフィクション大賞
受賞作）、『移民環流—南米から帰ってくる日系人たち』などがある。

『日本人と外国人が共に夢を持って生きるには』

杉山春（進行）

箱崎カリン×川口祐有子×村上アリセ×高木秀近

杉山 では始めさせていただきます。まず、お一人ずつ、今の状況や今に至るまでのお話をしていたらこうと思います。

最初は、豊田市の保見団地に住んでいらつしやる箱崎カリンさんです。箱崎さんは、まず豊田市に入ったんですが、その後、保見団地に引っ越され、そこで勉強して大学生になられました。今、たくさん夢を持っていらつしやる箱崎さんに、お話をうかがってみたいと思います。

大きな夢のために小さな目標に向かってがんばる

箱崎 私が大学に入れたのは、自分の努力もちろんなあるんですけど、親や先生たちの支えが大きかったと思います。私は小さいころから勉強するのが好きだったので、ブラジルでは常にいい成績をキープしていました。親の仕事の都合で日本に来ることになり、最初、親はブラジル人学校に入れてくれると言ってくれたんですけど、他の文化や言語を学ぶのにとってもいい

ヤンスだからということ、日本語が全くわからない状況の中で、日本の小学校に入りました。

その時は、もちろん、言葉が伝わらなかったんで成績はガタ落ちで、すごくつらかったりしたんですけど、最初に入った小学校は小さくて、外国人は1人もいなくて、しかも通訳がいなかったんで、「自分でやるしかない」という感じで、日本語、ひらがな、かたかな、漢字を一生懸命勉強しました。1年後に保見団地に引っ越したんですけど、最初の1年間で、皆と会話できるくらいの日本語能力になっていたんで、保見団地の小学校では、国際教室に行かなくてもいいというレベルにまでなっていました。

中学校で英語という教科に出会いました。私はポルトガル語が話せたことから、英語は日本語より簡単にできるようになり、また、中学校の英語の先生の教え方がユニークだったことから、英語の小テストでは常に100点をとるようになり、得意教科をがんばりました。中学校では、社会とかは成績がすごく悪かったんですが、英語だけはがんばって、成績は3年間ずっと「5」でした。努力をして、その時、気がついたのは、得意分野でモチベーションを上げ、やる気を出してから他の教科に取り掛かるとい

うことでした。

英語が得意だったことから、英語の先生に、国際コミュニケーションコースのある豊田東高校を薦められました。豊田東高校に推薦で行けるように、英語もがんばったんですが、他の教科でも内申点がとれるように努力しました。私の両親は、当時、公立でも私立でもどちらでもいいと言ってくれたんですけど、親の負担をなるべく小さくしたいという思いから、公立の豊田東高校にしました。

豊田東高校ではブラジル人の生徒が1人もいなくて、ちょっと寂しさを感じつつ、みんなと同じように勉強に励みました。高校は中学と違って、苦手な分野もがんばらないといけないんで、その中で数学が一番苦手で、とても大変でした。もうちょっと中学でがんばれば良かったと後悔したりもしたんですけど、そこは、「得意な英語の方を勉強してから数学に取り掛かる」という自分方式でがんばりました。得意な英語は、苦手な数学よりも少ない時間しか勉強してないのに成績が良くて、数学がうまくいかなかった時の自分の中の励みになっていました。高校時代は、得意な英語にいつも励まされていました。

どこの大学にするかは高校の進路の先生に相談しました。自分は将来何になりたいかということを相談してから、進路の先生がいろいろ大

学の選択肢をくれたので、自分の目で見ようと、各大学のオープンキャンパスにたくさん参加しました。英語の力を高めたいという気持ちから、名古屋商科大学の外国語学部に入りました。大学には、外国人の先生がたくさんいて、留学生制度もたくさんあったので、そこに行きたいという思いから、親にはすごく大きな負担だったんですけど、苦手な漢字等を勉強して無事に入学することができました。

高校2年生の時に勉強が嫌になり、挫折しそうなった時期もあつたんですけど、その時は、通訳をしてあげた後のとてもいい気持ちとか、昔から通訳の人にたくさん助けてもらったことを思い出して、またがんばることができました。勉強の方は気持ちの問題だと思つたんですけど、ちようど大学受験のときに不景気になったので、学費が心配になり、就職しようかなと思うこともありました。でも、両親に、「学費を理由に進学をあきらめるのは絶対に許さない。学費等は私たちがなんとかするから勉強の方に専念して」と言われたので、その時は頼ることにして、勉強をがんばり、大学に入ることができました。

今、学費は、卒業してから返すお金なんですけど、親の負担が全部なくなるように、日本学生支援機構の奨学金を申し込み、全額自分で支払っています。進学をあきらめようとしたときに止めてくれた親には感謝の気持ちでいっぱい

で、ありがたく思っています。

私は通訳になりたいという夢を持っているので、大学では英語の勉強を一生懸命やっています、来年の春にはイギリスに留学します。通訳というのはいろんな種類があつて、私は、まだどの種類の通訳をしたいのか決まっていなくて、大学で発見できたらと思っています。

私の大きな夢は通訳になることなんですけど、いつも、小さな目標、小さな夢を持つてがなばつていきます。ここでも、「出来る方からやる」という自分方式でやっていて、大きな夢というのはなかなか辿り着けないので、がなばつた分がわかるように、小さな目標を立てるようにしています。私は、失敗ばかりを繰り返している、あきらめてしまふんじゃないかと不安になるので、簡単すぎず難しすぎない目標を立てるので、やり遂げたあとの充実感とか、自分が成長していることを感じられるから、いつも小さな目標を立てて毎日がんばっています。

話は変わるんですけど、私には3つ下の弟がいて、同じ環境に育てられたのに全く勉強が好きではなくて、中学校を卒業してすぐに就職しました。私は、彼にすごく勉強を教えたり、高校の良さも教えたんですけど、「僕はもう勉強したくない」ときっぱり言つて、私と全く違う考え方で就職をしました。中学をちゃんと行ってなかったの、仕事続けられるの?という感

じで、私も両親も心配したんですけど、驚くことに、彼は中学校を卒業してから今でもずっと同じ会社で一生懸命働いています。

私たちの違いはいろいろあるんですけど、共通点は、小さな目標に向かつてがなばつていくところにあるのかなと思いました。私は通訳になるために英語をがなばつていくんですけど、彼は、車の免許を取るために、今がなばつていきます。小さな目標ですけど、一生懸命勉強して、あとは、仕事で認められるように、仕事も一生懸命がなばつていきます。

夢というのは、自分がやっていて生きがいになるものじゃないかなとも思っています。私の次の小さな目標は、大学の英語のスピーチコンテストで優勝することなんですけど、いつも小さな小さな目標を立てて、それに向かつてがなばり、それをやり遂げた後に、また小さな目標を立てるようにしています。

杉山 ありがとうございました。小さな目標を立ててやり遂げるといことは、大きく言ってしまうと、自分の力が何かを変えていくということを確認することかなとかがつていて思つたんですけど、それは皆同じですよ。多分、外国人とか何人(なにじん)とか関係なく、自分がやったことが何かを変えていく、何かを変化させて、違う自分に会えたり、違う人に会え

るのはすごく素敵なことだと思いました。それから、弟さんとちよつと違うとおっしゃっていましたが、ご両親の支えというのがどちらにもすごく大きいんだろうなと思いました。ありがとうございました。

お二人目は、名古屋市港区で外国人の子どものための放課後学習支援教室を開いていらつしやる「NPOまなびや@KYUBAN」代表の川口祐有子さんです。よろしく願います。

誰でも来ていい場所。「ユビについていんだよ

川口 まなびや@KYUBANの川口です。皆さんのお手元の資料の中にリーフレットがあると思うんですが、こちらの方に私たちの団体の概要が書いてありますのでご紹介します。

私たちは、法人格をとっていない任意グループ、ボランティア団体で、名古屋市港区の九番団地というところで活動をしています。九番団地というのは、UR（都市再生機構）さんが管理運営をしている公団住宅で、全戸数は1475戸あるんですが、平成22年現在、その24%が外国籍住民で、名古屋市内では最も多く外国人住民が集住している地域です。その中にモール9番街という商店街があるのですが、そのお店を1つお借りして、日曜日を除くほぼ毎日、

朝9時から夜10時まで、相談業務を行ったり、放課後学習支援教室をやったり、夜は成人向けの日本語教室を行ったりしています。

放課後学習支援教室については、日本語学習支援基金から支援をいただいております。夜の成人向けの日本語教室は県からの委託で行っております。また、就学前の子どもたちを対象にした子どものための多文化初期指導教室、私たちが使っている名称では「九番団地プレススクール」と言っていますが、これも県の委託を受けてやっております。お手元の資料に写真が載せてありますので、後でじっくりと目を通していただきたいと思えます。また、『いくれもん』、通称、‘勝手新聞’と言っているんですが、子どもたちが5人組で1か月に1回発行している新聞をみなさんにぜひ読んでもらいたいということ、ちよつと無理を言つて印刷をしていただき、こちらの資料につけさせてもらいました。こうした自主的な活動も私たちは応援しています。放課後学習支援教室と言っても、私たちは外国人の子どもたちだけを対象にやっているわけではありません。利用児童生徒数はトータルすると、60〜70名ぐらいになると思いますが、登録制ではないので、いきなりふらつと来ておしやべりして帰つていたり、ふらつと来て試験の勉強をしたりして、誰でも来ていい場所という風に開放しています。どちらかというと、イ

メージとしては日本語教室というよりも、学童保育に近い形だと思えます。もしよろしければ、「まなびや@KYUBAN活動日記」というブログに私のつたない文章で日々の活動を綴っていますので、ご覧になっていただければありがたいと思えます。

今の九番団地の子どもたちの状況を簡単に説明させてもらうと、ブラジル人の子どもがやはり非常に多くて、他に、ペルー、コロンビア、といった南米出身の子に加えて、最近ではフィリピンの子どもたちが増えてきています。そういった環境の中で、子どもたちは、親とのつながり、私たちの間では、これを「縦のつながり」と呼んでいます。それから友人関係という「横のつながり」がとてもしつかりできています。加えて、九番団地のとても素敵な所は、地域の人たちの「斜めのつながり」が非常に強い。日本人、外国人、国籍にとらわれず、斜めのつながりがしつかりできています。ですから、私たちも、地域の方たちに応援していただきながら、活動を続けさせていただいております。今のカリンちゃんのお話しを受けてコメントさせていただくと、小さな目標を持って日々それを越えていくためにがんばっていくというふうにおっしゃっていただんですが、本当にそうだと思います。皆さんも大きな夢と小さな夢を持つていらつしやると思うんですが、小さな目標

を乗り越えることで、カリンちゃんは「自分方式」と言っていましたけれども、どうやったら自分に自信が持てるのか、自分の存在価値を見いだせるのかということからつかんできたということが素晴らしいと思います。それが子どもたちに必要な力であって、先ほど杉山さんも講演の中でおっしゃっていましたけれども、どうやったら自分がここに理由を見いだせるのか、自分が自分であるということの確信を持てるのかということは、彼らが夢を持つ上で重要な要素だと思います。

でも、それだけではやはり夢は実現していかない。夢への一歩は踏み出せないと思うんですね。周りの大人たち、日本人たちが、「あなたはここにいていいんだよ」と彼らの存在を認めあげるといっても、やはり夢への一歩を踏み出す大きな大きな力になるはずなんです。そこで初めて、彼らは足場がしっかりして、初めの一歩が踏み出せる状況になると思うので、カリンちゃんの話、とても参考になりました。ありがとうございます。

杉山 ありがとうございます。いろんな国の人、日本人も含めて集まれる場所が名古屋市内に、日本中のあらゆるところに生まれてきていることがすごく素敵なことだと思います。暗い話になって申し訳ないですが、引きこもりの子

たちの支援をしている団体に足しげく通っているんですけど、そこにも外国籍の子たちは来ています。そこは日本人向け、外国人向けと分けているわけではないんですけど、外国人の子たちがきて、そこで時間を過ごしていくことができるようになっていきます。今、皆さんが思っているよりも、もしかしたら、人が混ざり合っていて、一緒に認め合っている居場所が増えていくというんじゃないかということを感じていますが、今の川口さんの話を聞きながら改めてそう思いました。ありがとうございます。

では次は村上アリセさんです。先ほど講演の中で川崎市に外国人のための会議があると言いましたけれども、愛知県でも外国人県民あいち会議という会議があるそうで、村上さんは、その代表者です。また、東浦町役場の外国人相談員や大府市の国際交流協会の相談員もやっておられますので、外国人の事情というのもよくご存知でいらっしやると思います。それではよろしくお願いします。

日本人にとって当たり前なことを外国人は知らないと考えてほしい

村上 杉山さんの講演の一番最後に佐藤リアさんの話をしていたのですが、自分とよ

く似ているなあ、同じ外国人だから同じ考えを持っていいのかなあと思いました。私の本名は村上アリセ・テルミ・フシキです。長いので日本では短くしているんですけど、ブラジルにいる時は、家の中ではお母さんからいつも「テルミ」と呼ばれています。でも、日本に来たら、わざと「アリセ」を使わせてもらっています。

理由は、リアさんと一緒に、自分は外国人だということを知ってほしいからです。子どもたちの学校では、PTAの役員をやりましたし、広報部をやったこともあります。自分も写真やカット担当でした。あと、自慢なのは、学校初のポルトガル語付きの情報誌をつくったことです。でも、今日は、外国人県民あいち会議代表としてここに参加させていただいておりますので、その会議のことを少し話させてもらいます。外国人県民あいち会議は、まず外国人県民に委員になっていただくために、一般募集をするところから始まります。選ばれた方々は、外国人県民に関係する問題について、年4回の会議で解決する方法を考えます。そして、会議で出された意見を県が行う事業に生かしたり、出された意見や話し合った結果を様々な組織に伝えることなどを目的としています。

今回のテーマは「外国人県民への情報提供」です。外国人県民に、どんな情報、そして、どうやったら効果的に伝えることができるかが課

題になっております。会議では、そういった課題について考えながら、外国人が知りたいと思える情報が載っているニューズレターをつくって、外国人に届けていこうと思っております。

ニューズレターの内容について、事務局のほうから教育、交通、ルール、労働などいろいろな案が出されたので、何が一番必要かについてメンバー全員で考えました。情報は人や場所や国籍によって求めているものが違うので「全部必要」という結果になりました。だけど、全部取り上げるのは不可能。どうしたらいいのかわかると、多くの市町村や県、そして国などが母国語で提供しているものをもっと上手に利用できるコツを外国人県民に伝えることに決まりました。詳しい内容は、来年（平成23年）の2月に発行される予定のニューズレターで確認してください。きつと写真だけのものにはなりませんので。

それ以外で、インターネットでいつでも簡単にアクセスできるように、県が母国語で提供しているいろいろな施設のアドレスを一つにまとめるようにお願いしました。情報は正しく、わかりやすく提供することが必要です。正しくするためには、日本人向けの情報をただ翻訳するのではなくて、外国人向けの情報にしてから翻訳に出してほしい。例えば、国民健康保険に加入する時に必要なものの中に、「住民票」と書

かれておりましたが、外国人に住民票はありません。そういうのを書かれると困ります。

わかりやすくするためには、母国語に翻訳するか、わかりやすい日本語にしてふりがなを付け、それ以外に、日本の文化も少し加えていただければいいかなと思います。例えば、ブラジルには、入学式というものがありません。だから、入学式の案内に、時間とか日にちだけ書いて出すと、多分、ブラジルの人は、子どもだけを普通の格好で行かせてしまいます。日本の入学式は、「保護者が同行する。普段着ではない」と書いていただくと嬉しいですよ。

そして、どこにどんな人がいるか調べて情報を提供することも大切です。例えば、ペルー、ボリビアなどのスペイン語系の人が多いところにポルトガル語の情報を出してもあまり意味ないです。あと、留学生ばかりいるところに子育ての情報を出してもあまり利用してもらえませんが。外国人への情報は紙やインターネットだけではなく、口コミという方法もあります。

それに、外国人住民と日本人住民がふれあえる場所ももっと必要です。外国人も積極的に地域や学校のボランティア活動に参加するように呼びかけた方がいいです。例えば、私の場合は、母の会、PTA、いろいろしてきましたけど、全部、やりたいからやっているのではなくて、周りの日本人が逃げられない状況をつくるから

やっているだけなのです。

2月に発行予定のニューズレターは、学校、役所、入国管理局、お店など、外国人がよく行きそうなところに置かせてもらうように、県と今年の委員がお願いすることになりました。皆さん、もしも置いていただける場所をご存知でしたら、ぜひ県の多文化共生推進室に伝えてください。お願いします。

12月に行われる予定の第4回目の会議を含めて、本当に短い時間でしたけど、いろいろな個性や文化を持っている方々が、「自分たちと同じ外国人のために」という一つの気持ちでたくさんのお見出しを出したので、とても意味がある会議になりました。これからは、県をはじめ様々なところで私たちが心から出した意見を生かしていただければありがたいと思います。

この会議で出された意見の中で、今回のフォーラムのテーマに一番よくあてはまるのは、やはり教育についてだと思います。子どもの夢を支えるのも親の大事な役目です。その親が情報不足で子どもが夢をあきらめないといけなくなるのはとても悲しいことだと思います。日本人にとって当たり前なことを、私たち外国人は知らないと考えてほしいです。

例えば、内申、推薦入学、予算など、高校や大学の入学につながるものを中学生になってから初めて聞いて、それから準備を始めるという

話もよく聞きます。点数に関係ないという理由で、小学校では出す習慣のない提出物を、反抗期の年齢の中学生になってから出せと言われても出す子は少ないと思います。同じく、学生服などがこんなに高いと思わないと両親がたかさんいます。急に学生服を買わないといけないとなると、その金額を出せない家庭もあるという話をときどき聞きます。親が学生服を買うお金がないから、子どもは中学校に行かないという話も聞きます。なので、進路などの情報は早めをお願いします。

杉山 ありがとうございます。生活してみないとわからないこと、実際にその場その場を生きてみないとわからないことがものすごくたくさんあるんだなということを、今、村上さんの話を伺いながら改めて思いました。講演でお話した神奈川県愛川町は、多分帰化したと思うんですけど、去年から、日本で育ったペルーの子が役場の職員になりました。ちゃんと試験は受けているんですけど、そうしてほしいという日本人の人たちの声やブラジル人の声があつて実現しました。今、いろんなところでいろんなものがどんどん変化している時代です。やはり情報を出すことも重要だし、社会の一員になってもらつてちゃんと通訳してもらつたり教えてもらうことも大事だと思つています。

先ほど講演で私が話した『移民環流』の話は、ちよつと古いかもしれませんが、国の施策が入り、県の施策が入つて、当時と随分変わつていんじゃないかなと思います。特に愛知県はすごく進んでいるという話を聞きました。そうすると、生活の仕方も変わつていくんですが、それでも補えない情報、本当に知らなければいけない情報はまだまだたくさんあるんだなということを感じました。まだまだ変化の途中です。どこまで変化するか楽しみでもあります。また、高木さんにはそういったことを充分に聞きとつて対応していただきたいと思つています。では、高木さんお願いします。

愛知県の主な施策

高木 愛知県多文化共生推進室の高木でございます。今さらお話しするまでもないと思つています。愛知県には多くの外国人県民の方がいらつしやいます。20万人を越える外国人県民の方がいらつしやいます。特にブラジルの方が多くて、6万7千人くらいいらつしやいます。これは日本でも一番という数になっております。そんな中、愛知県としては、外国人県民の方の永住化・定住化が進んでおり、抱えていらつしやる問題もだいたい複雑化してきていますので、それ

に対応するために、相談だけでなく、積極的に外国人を取り巻く環境にも働きかける「多文化ソーシャルワーカー」というのを平成18年度に、全国初なんですけれども、養成をし始めまして、19年度からソーシャルワーカーの方々に活動をしていただいております。それと、これも全国初なんですけど、外国人の労働者の方を適正に雇用しようという憲章をつくりまして、企業さんに守つていただくよう働きかけているということでございます。

今日のテーマは夢なものですから、夢についてちよつと申し上げますと、まずは子どもさんの教育が大切だと考えます。文科省の調べによりますと、日本語指導が必要な児童生徒の数は、愛知県は5800人くらいと聞いております。2位が静岡県で2900人くらいなので、2倍以上ということになり、すごい数だと思います。日本語ができませんと、進学ですとか就職に非常に支障をきたしますから、愛知県教育委員会では、通常の定員に上乘せする形で加配教員を各学校に配置しております。愛知県下で約300人を配置しております。さらに語学相談員という方も7人配置しているということでございます。

ただ、なかなかそれだけでは子どもさんの日本語能力が上達していかないので、多文化共生推進室では、日本語学習支援基金を平成20年6

月につくりまして、企業さんですとか個人、ほとんど企業さんなんですけれども、寄付をいただきますして、それを元手にしまして、地域の日本語教室ですとか、県下の外国人学校に支援をしております。先ほどのまなびや@KYUBANの川口さんのところにも日本語教室をやっていたいております。それから、大人の方もリーマンショック以降の不況で、就職するには日本語が必要だという声を企業さんから聞くもんですから、大人の方にも日本語ですとか生活ルールを学んでいただくために多文化共生促進教室というのを全県下で展開しております。これは国の緊急雇用基金事業というのを使っております。愛知県の主な施策としてはこんなところだと思います。

杉山 愛知県は進んでいると聞いてきましたので、ソーシャルワーカーのことなど面白いなと思ってうかがいました。それでは、もう一回箱崎さんにお話をうかがいたいんですけど、先ほどの講演の中で、「ブラジル人はしょぼい。日本人になりたい」と言っている愛川町の子の話をしたんですが、箱崎さんよりもうちょっと上の人たちに聞くと、「そうだろうだ。そういう風に思った」という声が聞かれることがあります。箱崎さんはそれを聞いてどう思われますか。また、ご自分の生まれた国をどう思っ

育っていらっしやったのかおうかがいしたいと思えます。お願いします。

外国人であることを隠したことは一切なくて、誇りに思っている

箱崎 私は10歳までずっとブラジルで生活して、そのあと日本に来たんですけど、日本に来た時には文化の違いですごくショックを受けました。生活していくと、日本の文化にも慣れてきて、自分も日本人みたいになるんじゃないかと思ったりもしたんですけど、ブラジルの習慣や文化がいつまでたっても離れないところがあって、自分はブラジルの血が流れてるなと感じます。

今まで日本で生活していて、自分が外国人であることを隠したことは一切なくて、誇りに思っているんですけど、私と同じ大学の同じ学年の友人で、ハーフの子は、日本で生まれて育っているの、自分の国のことについて一切知りません。周りの友達とかにも自分がハーフだということ言えてなくて、最初出会った時に、堂々としている私に、「気にしないの?」と訊いてきました。犯罪が起きてブラジルがニュースになったりする時には嫌な気持ちになるんですけど、みんながみんなそうじゃないんだよと

いうことを周りに伝えたり、治安が悪いと言われても、治安は悪いけど他にもいいところがたくさんあるよとか、自分が今まで生活してきたことを皆に伝えていきます。友人は生活したことがないから、周りの情報だけで自分の国のことを悪く思ったりしているから、知らないという誇りに思えないんだな、情報は大切だなと思えました。

私は、高校と大学は、「ブラジル人だからポルトガル語もできて、日本に来て勉強したから日本語もできて、だから、この高校とかこの大学で、一生懸命英語も勉強したのでぜひ受からせてください」みたいなことをいつも言っていたのでできました。なので、アピールできるところはアピールしています。ブラジル人だからできないとか、不利だとか思ったことはなくて、国とか関係なく、人として、やる前からできないとあきらめる気持ちにはならないし、挑戦する前からあきらめるのはよくないと思っていて、外国人だからできないと思わずに、努力が足りないからできないんだと思って毎日がんばっています。

杉山 いろんなことを今までやってきて、少しずつクリアしてきた経験というのが、多分、すごい自信になり、何人(なにじん)ということよりも、一つ一つクリアしてきたことが貯まっ

て、貯まって、次のジャンプにつながっている
ということですね。

箱崎 そうですね。大学の前に高校に受かり、
高校には外国人がいらないんだけど、勉強をがんばったから大学に受かった。外国人だからとか
じゃなくて、一人の、私の、箱崎カリンとして、
いつもがんばっています。

杉山 来年イギリスに行かれるということで、
日本を離れ、ブラジルとも違う国で勉強して帰
ってきた時に、何と言ってくるのかすごく楽
しみです。いろんなものを見てチャレンジして
きてください。

川口さん、先ほど周りの大人がすごく大事と
いうことをおっしゃっていましたが、自信を持
つことに對して何か気をつけていらっしやるこ
ととか、いろいろあると思うんですが、そこら
辺りのことを教えてください。

いろんな世界を見るためのキツカケが必要。
**日本語は自分が進むべき方向が見えてくるラ
ンプみたいなもの**

川口 そうですね。みなさんもちょっと中学生
くらいのことを思い出していただけるならば、
自分は何になりたいのかと問われた時にきちんと
と答えられましたか。自分に自信はありました

か。私なんかもそうなんですけど、中学生時代
というのは、なんだか暗闇の中で、足元もなん
かドロドロした感じで沈んでいくような、自分
がどこの方向に向かって行ったらいいのかもな
んとなくわかるようでわかっていないような状
況であったと思います。外国人の子もたちで
あろうと日本人の子もたちであらうと、そう
いう時期であると思うんです、中学生時代とい
うのは。じゃあ、そういった中でどうやって彼
らが自信をつけていくのか。カリンちゃんもカ
リンちゃん自身で、どうやってたら自分が自信を
持てるのかということをつかみとっていったわ
けなんですけれども、それが、自分ではとても
つかみとれない子どもたちがいっぱいいるわけ
なんです。

例えば、私なんかもそうなんですけど、私は
陸上競技選手でした。それも第一線でやってい
た選手で、もう少しで日の丸のユニホームを着
てオリンピックの舞台も夢ではなかった。でも、
陸上に出会ったのは中学校に入ってからだっ
たんですが、それまでは体育が大嫌いだっ
たんです。体育の成績だけは「2」か「3」で
した。でも、陸上に出会い、人よりできると
気が付いたんです。そして、それを見出して
くれた先生の応援もあって、あれよあれよ
という間に神奈川県のユニホームを着るようになり、全国大会で
闘うようになりました。でも、それはキツカケ

があつたからなんです。私が陸上競技に出会う
キツカケがあつた。

今の外国人の子もたちにキツカケはありま
すか。いろんな世界を見る出会いはありますか。
カリンちゃんは英語を武器にがんばってきたん
ですけれども、今の子どもたちは、武器にでき
るものがなかったりするんです。例えば、何の
世界でもいいんです。外国の世界であつてもい
いかも知れないんですけど、それが、お菓子の
世界かも知れない。映画の世界かも知れない。
カメラの世界かも知れない。車の世界かも知
れない。世界の世界かも知れない。いろんな世界に出会
って、自分に何ができるのか、自分にどうい
った適性があるのかというキツカケすらない。

その子たちに、日本語を覚えなさい、もつと
もつと勉強をきなさいと言ったところで、モチ
ベーションが上がるでしょうか。さつきカリン
ちゃんも、モチベーションを上げるために英語
から取り掛かったと言っていました。彼らだっ
て、モチベーションの基礎となるものは絶対に
必要なんですが、それがなんなのか、出会うキ
ツカケさえない。

そこがやはり大きな課題なのではないかとい
う風に私は考えていて、まなびやでは、ブラジ
ル人の子がタガログ語を学ぶキツカケを与えて
あげたり、新聞づくりに興味がある子があれば
そういった舞台を与えてあげたり、編み物をし

たいという子がいけば毛糸と編み棒を用意したり、といったことをやっているんですね。それが将来どういう風に広がっていくのかはその子自身だとは思いますが、いろんな世界を見るキツカケというのは彼らにとつて必要ではないかと思つて、私たちはやっています。

だから、日本語が決して必要でないとは言いませんし、日本語がなくては絶対だめとも言いませんが、この日本に生きている外国人の子たちがどうやって生きていったらいいのか、この真つ暗な暗闇の中で、自分がどうやって目的を定めて歩いていったらいいのかという、例えるならば、ランプみたいなものでしょうか。例えば、お菓子職人になりたいと思つた時に、「日本語」というランプを持っているならば、そこを照らして、なんとなくこつちの方向かも知れないといったことが見えてくるかも知れないし、こつちが近道ですよといった文字が見えるかも知れない。いろんな情報が、日本語というランプを使うことによつて、近道というか、自分が進むべき方向が見えてくるかも知れない。だから、日本語というのは大きなランプとしか言いようがないんです。日本語がなくてはだめというわけではないと思います。日本語がなくては夢に進めないというわけではないですが、やはり、その子がより推進力を持つて夢に向かつて進むためには日本語を使うという方法があると

いうこともとても大事だと思つています。

杉山 日本語がランプだという言い方はとてもそうだなと思つて、日本語ができるから見えてくるもの、日本語を通して何かができるということはすごくあると思います。あともう一つ、先ほどおつしやつていた外国人の子どもがそういう体験ができるのかというお話なんですけど、引きこもりの取材をしていたり、不登校だったり、そういう日本人の子どもを取材していても、同じ問題があります。

今の社会は大人が注意して育てている子どもたちはすごく伸びて行く可能性がいくらでもあるんですけど、大人の目がうまく入っていない子たちは、いろんなものに出会う機会が乏しいです。閉じこもつてしまうと、どんどん乏しくなつてしまふ。それにどうやって私たちが関わつていくかは、子どもたちの責任ではなくて、大人の側の責任かなと思つています。いろんな可能性を子どもたちに伝えたいと思つていらつしやる川口さんの思いはすごく大事だと思ひますし、それは私たち一人一人の責任でもあるかなと思つています。

村上さんは先ほど外国人県民あいち会議の話を中心にしてくださいなんですけれども、お二人のお子さんをお持ちのお母様でもあります。母親として、子どもを育てながら、この日本で

生活してきた体験によつていろいろ見えることもあると思います。特に自尊心のこととか含めてお話しただけですででしょうか。

ルールが変わるまで待つと間に合わないの、取りたくなかつた日本国籍を家族で取る決心をした。「昔から」という言葉にこだわらず、現在の社会に合っているルールづくりに取り組んでほしい

村上 私自身は3世なんですけど、祖父祖母は日本人で、特に祖父は非常に頑固な日本人でした。ブラジルに60〜70年くらい住んでいたんですけど、「自分と話したい孫は日本語を覚えて来い」という感じのおじいちゃん、そういうおじいちゃんと同居していましたので、私は、ブラジルの小学校に入るまでは日本語しか知らなかつたんです。ポルトガル語を知らずにブラジル人の学校に行つて苦労して、イジメにも遭いました。そういう経験を子どもにはさせたくない。

母親として日本で体験したお話をするようにということなんですけど、学校が母国語でお知らせを提供する前には、担任の先生に、できるだけふりがなをうってくださるようお願いしたり、近所や会社の方にお知らせを読んでもらつたり

しました。なので、学校が母国語でお知らせを提供してくれるようになってからは、かなり楽になりました。

あと、できるだけ多くの日本人と触れ合えるキッカケをつくり、直接情報が提供できる環境をつくってきました。特に、学校の進路については、学校から説明がある何年も前に日本人の先輩のお母さん方にうるさいと言われるくらい細かく聞くようにしています。学校には、もっと早く情報をくださいとお願いして、外国人の保護者には、おせっかいと言われるのを覚悟で、聞かれる前に自分から積極的に伝えるようにしております。

私の世界は小さいです。愛知県にしか住んでいなくて、特に、3年前までは外国人の多い団地の中に住んでいたのですが、自分の子はブラジル人が非常に多い学校に通っており、外国人だからということではイジメに遭ったことはないし、小学校2、3年生くらいからは情報もポルトガル語で来るようになりました。なので、杉山先生から、全国の外国人があまり住んでいないところの話とか、情報が提供されていないところの話聞いて、先生の本が古いということではなく、私の世界とは違うと思いました。こういう子もいるんだと思ったので、ぜひ本を買って、子どもに読ませたいと思っています。なぜかと言っと、自分たちがどれだけ恵まれた環境に育

っているのかを知ってほしいからです。

私が住んでいる東浦町には多くの外国人が固まって、一つの地域に住んでいることもあり、対策が取りやすい条件に恵まれていることで、ほかの地域より外国人世帯への情報提供は進んでいると思います。それでもまだまだ足りないことはたくさんあると日々感じています。

個人的には最近かなり気になっていることがあります。それは、中学校3年生の長男の将来についてです。

彼は陸上の中距離でがんばっており、高校や大学で駅伝大会に出ることを夢にしております。駅伝というと私立高校のほうが強いです。でも、学費が高い。もう一人、年子の中学校2年生でアスベルガーの子がいますが、その子は私立の方がいいと思っています。なので、2人の高校の学費を払うのは難しいと思います、一年ぐらい前から、どんな手当てがあるかを少しずつ調べないようにしています。ある日、外国人への奨学金の情報を見かけたので電話で確認したら、「外国人」と書かれているけど、本当は、「留学生」の枠なので、小学校1年生から日本の学校に通っている生徒はその枠に当てはまらないですと言われました。その時にはなるほど思っ

て諦めました。最近、駅伝大会に参加するチームには留学生の人数の枠が決められていると聞いたことがあ

ったので、ちょっと気になりました。今は駅伝ブームなので、中距離でちょっと早い子にはいるんな高校からいっぱい声がかかってきますが、うちの子もその一人です。うちの子に声をかけていただいた高校の先生にお尋ねしたら、「留学生ではないので大丈夫だと思うよ。いずれにしてもうちの高校には留学生がいないので大丈夫」とのことでした。

奨学金のこともあり、本当に大丈夫なのか私は不安になりました。一度気になったらきちんとした答えをいただくまで納得できない性格なので、一応、愛知県教育委員会に確認したら、高校の大会は留学生の人数が決められていないけれど、大学の大会には人数が決められているのもあるとのことでした。そして、「留学生」ではなく「外国人」ということになっていますので、うちの子のように、日本で生まれて日本の小中学校に通っていても留学生と同じ扱いになるそうです。

本当にショックでした。なぜ、奨学金については「外国人」と書かれていても留学生だけがもらえるルールなのに、大会に参加する時には留学生と同じ扱いになるのでしょうか。おかしいと思います。私は納得できません。でも、ルールが変わるまで待つと間に合わないかもしれない。

そこで、本当は取りたくなかった日本国籍を

取るように決めました。なぜ日本国籍を取りたくないかという点、今まで私の話しを聞いて気にかけていると思いますが、私の日本語は決して日本語ではないです。村上語です。日本人だと言っていると、「この人って何かおかしくない？ 変な言葉使ってる」と思われます。日本国籍を取らなければ、「すみません。外国人です」と言えるので便利なんです。

そして、もう一つは、いくら日本国籍をとっても、うちの子は日本人と同じようにはなれません。なので、彼らに、「自分たちは外国人の子だよ。そして外国の文化を持っているんだよ」というのを忘れてほしくないで、自分と同じように、子どもの名前もわざとカタカナにして、周りの人がこの子たちは外国人だとわかるようにし、そして、自分自身がそれを忘れないようにしております。

なので、日本国籍はとりたくなかったです。でも、こういう条件になると日本国籍をとった方がいいなと思って、法務局に行つて日本国籍をとるために必要なものを確認しました。

子どもが一人で申請するには20歳になるまで待たないといけない。でも、20歳まで待つと大学のスポーツ推薦には間に合いません。申請してから結果がでるまでは少なくとも1年から1年半ぐらいかかるそうです。大学の大会にも間に合わないかもしれない。だったら家族で申請す

るしかない。法務局ではその場合は全員でとるのが理想と言われました。私と子どもの3人だけだったらすぐに申請できるけど、お父さんは、申請するために必要な漢字レベルを持っていません。それはどこまでかという点、小学校3年生くらいの漢字の読み書きと、あと、文章もつくらないといけないそうです。ということ、これから家族全員でお父さんの日本語の勉強を手伝つて、長男が高校を卒業する前に日本国籍がとれるようにみんなでがんばる決心をしました。おそらくこの条件は駅伝だけではなく、ほかのスポーツにもあると思います。私たちには、まだ大学に入るまで3年以上の時間があります。では、この情報を大学の受験の時期に突然聞かされた少年の夢はどうなりますか。

皆さん、「昔から」という言葉、日本人の口癖みたいによく言われます。そういう言葉にこだわらず、現在の社会に合っているルールづくりに取り組んでください。子どもたちが社会に希望や将来に夢を持つためには学校だけではなく、地域全体で子どもたちを支えて、その保護者を応援していくことが必要だと私は思っております。よろしくお願いします。

杉山 ありがとうございます。「昔から」ということではなくて、現在の社会に合っているルールづくりに取り組んでほしいと言うのは大切

なメッセージだと思えます。私たちは過去に戻ることにはできません。こういう言い方がいいかどうかはわかりませんが、一緒に生きて行く以外に他に道がなくて、そのためには、皆さんが生きやすい社会にならないといけません。皆と一緒に生きられる基盤をつくっていくのはこれからです。本当に、これはとても素敵な大事なメッセージと思って受けとめたいと思います。

私は、奨学金のことを聞いた時に、外国人と留学生の線引きの問題がすごく大変だなと思いました。日本でものすごく努力して、箱崎さんみたいに大学生になられた方を何人か知っているんですけど、ある青年は大学を卒業した時に350万円の借金を背負つて社会に出て行った。彼はまだ23、4歳で、これから結婚相手も探すだろうし、もしかしたら、やりたいことが他にもいっぱいあるかもしれないけれど、とりあえず、この借金を返さないと戻らないと思つてい。そうすると、次の夢を作りだすときにすごく足かせになってしまうんですね。

日本の子どもでも借金持つて出て行く子はいます。確かにそうなんです。だから、若い子が社会に出て行った時に、それだけの借金を負わないと、学歴という点、大学卒業の資格がとれない仕組み自体をできれば変えられないかなあと思つたりします。いろんなやり方があるんだとは思いますが、外国のお子さんが大

学に行くためには、やはりハンディはどうしてもあるわけだから、それに向けての奨学金があるといいなと思いました。

それから、もう一つ感想で、お子さんが社会の中でしっかり生きて行くために国籍を変えるという判断をご家族がされるその重さというのをすごく思いました。自分の国を愛しているのに、それでもやはり変えようと思われる。やはり、当事者と言いますか、日本の中でそういう体験をされている方の言葉は重いなと思いつながら、できることを皆さんで考えながらやっていたらいいなとすごく思います。

杉山 今までのお話を聞いて、会場の皆さんの中でご意見、または感想でも構いません。今日せっかくなので、参加した印に何かひと言しゃべってほしいと思います。はい、どうぞ。

混ざること必要だが個々を確立することも必要

参加者A 今日多文化共生フォーラムに参加させていただきましてありがとうございます。私はイスラム教徒のためのNPO団体をしている者です。今日のパネルディスカッションを聞

いていて、今日は、ブラジルの方とかペルーの方とかが対象の話なのかなあと感じながら聞いていました。私は、箱崎カリンさんの通っている大学を卒業し、イギリスに留学し、九番団地のある港区に暮らしています。

杉山先生にアドバイスを受けたいのは、先日、警視庁の情報が流れました。それで、その中に名古屋モスクのある方の名前がテロリストとして挙げられていました。私たちの中には2世がいます。ほとんどがハーフです。同じような国籍同士で結婚された方は、留学されたあと、いずれ帰りますが、私たちはここで暮らしていきます。

宗教観を出してはいけなかもしれないですが、第2世代を培うために、私たちはいろんなことをしています。土曜日のモスクでのお食事会にはホームレスの方がいらつしやいます。また、私の知り合いの引きこもりの子は、学校には行かないけれどもモスクには通っています。彼は、ちょっと特殊なバックグラウンドがあって、日本人同士のご両親ですが、マレーシアで育ったので、イスラム教にとっても親しみを持っています。その子が初めてやりたいと言ったのが、イスラームを勉強するということでした。それで、ご両親は喜んで、子どもさんをモスクに通わせています。

そういったことで、私たちは、身近な人たち

と触れ合いたいと思つていますが、宗教上のごとで、一緒にお食事もいただけないので、お弁当を持たせています。そんな人たちがテロリストとして名前を挙げられ、そういうレッテルを貼られるというマイナスからのスタートを、今後、どう乗り越えていったらいいのでしょうか。

この間、COP10の会議にも参加いたしました。英語の能力が結構高いので、ボランティア通訳として推薦していただき、メインの会場のお手伝いをさせていただきましたが、宗教観を出さずに、多文化や多様性を実現することはできないと思います。「みんな一緒に手をつないでゴールしようね」という日本的な考え方ではなく、「あなたは体育ができるけど、私は絵がうまいの」という個々の違いを認めるようなことを、もう少し県にも考えてほしい。

今回のフォーラムの会場は、ウィルあいち、と書いてあったんですが、私は、ウィルクあいち、と間違えて、そちらへ行つてしまいました。日本なのに、なぜ横文字に頼らないといけないのでしょうか。カリンさんもそうだと思いますけど、英語を習いたいからイギリスに行くんです。もし、イギリスで皆が日本語をしゃべっていたら、あるいはブラジル語をしゃべっていたら、行かないと思うんですね。違いを求めてやってくる人もいるはずなんです。

私は、アメリカ人に英語を習いました。でも、

私は、そのアメリカ人に「なんで英語をしゃべるんだ。ぼくは日本語を勉強しに来たんだよ。君の英語の練習の土台じゃない」と言われたんです。その時に、初めて、自分が日本人であつて、日本語をきちんと話さないといけないんだということを経験しました。だから、混ざることと必要なんですけど、個々を確立するというのを、日本人も一緒に学べたらいいんじゃないかなあと思つて、今回は参加しました。

いろんな人たちがいろんな姿で生きていることを知っておくことが大切

杉山 私が一番最近、月刊日本語に書いたのは、群馬県の伊勢崎市にあるモスクのイマーム（宗教的指導者）のご家族の話です。私自身はイタリアにいた頃にイスラムの子たちと過ごしていたことがあり、イスラムの子に助けってもらいました。歌のレッスンの先生を探しに行くのに、イスラムの子が助けてくれて、「なんで日本人はちゃんとやらないの。教えてほしかったら教えてほしいって言いなさい」と言われて、ハイハイと聞くことを聞いて、歌の先生を探したりしたことがあります。

私は、イスラムの人たちの宗教観というのは素晴らしいと思います。いろんなイスラムの方

がいるとは思いますが。テロリストと言われていた方たちが頑なになっていくのは、宗教性というよりも、社会の事情の中でそうなつていったということだと思えます。日系人の人たちがすぐに離婚したり結婚したりするのは、あの人たちの文化で、アモーレが大好きだから、と言われますが、本当は違う。その土地に行くと、その土地に根差した社会の秩序があつて、その中でしっかり生きていく人たちがいる。

私は、イスラム世界はエジプトとイランぐらゐしか行つたことがないんですけど、やはり、その土地土地ですごく立派に生きている人たちがいて、それは庶民の中にもいっぱいいるということは知つていられるつもりです。私はフリーランスで、どこかの企業に属しているわけではないので、そういった一人一人の言葉に耳を傾け、文章を書きたいという思いがあります。私ができるのはそういうことだと思えます。

伊勢崎のイマームは、日本に住んでいてとても幸せだ、と言つています。お嬢さんもすごく表情が豊かです。彼は、身長が180cm以上あるので、最初、ちょっと怖い感じがあつたんですが、子どもの前でニコニコニコと笑つて、本当に素敵なお父さんでした。

いろんな人たちがいろんな姿で生きていることに対して、私たちは知つておくことがやはり大切で、今、私ができることは、それかなと思

います。あとは、おかしいことはおかしいとちやんと言うこと、それぐらゐかなあと思つています。他にも、いろいろなことが言えるかも知れませんが、今とつさに言われてお返しできるのはそれくらいです。

本当にイスラムというのは素敵で宗教だと思えます。彼に、将来も日本にいたいのかパキスタンに帰りたいのかと訊いたら、どちらにもニコニコと笑つて答えませんでした。多分、イン・シャー・アツラー、「神様が決められる」ということなんだろうなと思つて、そういう風に文章に書いたら直されなかつたので、正しいと思えます。そうした感性を、私たちはすごく失つていっていると思つていられるので、そういう素敵なものを知ることとすごく大事だと思えます。

村上 私も同じ考えで、実はブラジル人の話になるんですけど、多くのブラジル人は言葉がわからない、あるいは仕事が忙しい、学校や地域の方々に理解していただけないなどの理由で、日本人と触れ合うことから遠ざかり、同じ国から来た人だけのコミュニティをつくつて、そんな中で生活しているので、なかなか日本語を覚えられないです。

情報はコミュニティの中心になつていられる方を通じて聞くことができる。そして、伝えることもなんとかできるけど、文化やマナーを伝えるのは難しいです。なので、大府市が今年からス

ターゲットした多文化共生推進委員会のように、外国人と日本人住民が一緒になって役所の職員と意見交換ができることや、愛知県の多文化共生推進室が行っている外国人県民あいち会議のような、外国人がもつともつとたくさんの意見が出せる場所をつくってほしいと思います。そして、最近、名古屋国際センターが行った「わたしのフォトストーリー」のように、中学生が自分たちの夢を披露できる場所をつくってほしいし、学校や地域の日本語教室では日本語という言葉だけを教えるのではなくて、日本のルールや日本の文化を教えてほしいです。そして、外国人の気持ちと文化を聞ける場所がもつともつと地域の中に広がっていけば、外国人と日本人が共に夢を持つことができるようになると思は信じております。

杉山 まとめていただいたぐらいの素晴らしいお話でした。もうお一人かお二人、せっかく来ていただいたので、お話をさせていただいたら大変いいなあと思います。感想でも構いません。

日本で単純労働しかやってこなかった人はブラジルに帰っても仕事が少ない

参加者B 杉山さんの本、『移民環流』を読ま

せていただいて大変勉強になりました。その中に、ブラジルだと40歳になると仕事がなかなか見つからないと書いてあったんですけど、その辺の事情を説明していただけたらと思います。実は、日本ですと年功序列制度とか35歳以上になると就職がみつからないとか、一般的に言われているんですけど、ブラジルではそういう年功序列制度とか年齢制限というのがあるというのが意外だったので、その辺の事情を詳しく話していただけたらありがたいと思います。

杉山 ブラジルでは公務員は何歳でもなれます。職種によっては日本よりずっと年齢制限がなさそうです。ただ、人間には労働力の適切な年齢というか、いっぱい働けると言われている年齢が多分あるんじゃないかと思うんですが、日本の中で単純労働しかやってこなかった人というのは、電話を取ることもできにくいとか、いろんな人をマネージメントすることもできにくいとか、そういったことをブラジルで取材したときに言われました。

ブラジルには結構仕事があるんですけど、ブラジルの社会はいろんな能力を持った人が必要なのに、日本から帰ってきた人たちは、工場の中で右から左へ物を動かす仕事しかしてこなかった人が多いので、そういう人たちはすごく仕事が少ない。特に40歳を過ぎてしまうと、とても厳しいという話を聞きました。

ブラジルに取材に行ったのが今から4年くらい前で、ブラジルの経済と日本の経済の形も変わってきていると思うので、今の現状については申し訳ないですがわかりません。ただ、本に書いた当時はそのように聞きました。やはり人は多様な能力を使って生きていくのがいいなあとその時思ったものでした。

他にどなたか今日のお話に関わって、何かありますでしょうか。

拠点Ⅱいつも在る場所。いつもいる人がそこにいる

参加者C 犬山市で外国人の子どもたちと学習等と一緒にしている者ですが、川口さんにお聞きします。今、子どもたちや大人たちと一緒に、学んだり、文化を交換したり、気持ちを交換したりしながら、地域で暮らしやすくなりたいなと思って活動しているんですけど、拠点がありません。それで公民館とか集会所とかお借りして定期的にしているんですけども、やっぱり拠点が欲しくなっています。実は、川口さんのところに見学をさせていただいた時に、壁に貼ってある「あいいうえお表」とか、子どもたちの絵を見た時に、こういう場がほしいなと思ってしまったんですね。でも、実際はかなり難しいと

言うか、集住地区とは言っても、大山の集住状態と九番団地の集住状態は違っていますし、周りの人たちは、もちろんよくしてくださっているんですけども、協力の度合いも違います。行政の関心の度合いも違います。そこら辺のお話をお聞きしたいんですけど。

川口 拠点を持つことに關しては、やはり私も最初すごく悩みました。リーフレットにもあるんですけど、まなびやは平成20年の10月にオープンしました。まだ2年ぐらいなんです。5年くらい前から、九番団地で着々とコネづくりは進めていたんですが、本当は、集会場でやりたかったんです。なぜかと言うと、とても安いじゃないですか。でもですね、先ほどおっしゃったように、集会場だといろいろな団体さんが使うので、その都度、教材を置きっぱなしにできないから運び出さないとけない。それから、壁にもいろんなものをずっと貼りっぱなしにしておくこともできない。それから、24時間、子どもや大人の方たちが誰でも利用できるようなところにしたということと、あと、九番団地の集会所というのは外からなかなか見えにくいところであり、それも非常にネックでした。

だから、あまりお勧めしないんですけども、少なくて恥ずかしいんですが、全財産をつぎ込んで、お部屋を借りました。私は九番団地で一番貧乏だということでは有名なんです、お金を

切り盛りするのがすごく難しく、それでもやはり拠点を持つことのメリットはすごく大きいです。子どもたちがよく言うんですが、「ここは私たちの家だ」と。

逃げ場なんです、一つの。家で何かあった時にここに行けば、なんとかなるとか、誰かが話を聞いてくれるといった、いつも在る場所、いつもいる人がそこにいる場所、といったものが、すごく子どもたちの心の安定につながっているような気がしていて、やはり集会所ではなく、すごく出費は痛かったけれども、拠点を構えてよかったと思います。

ただ、私たちのやっている活動が、どこの地域でも成功するかと言うと、そうではないと思いますし、保見団地の方に私たちがやっているような活動を持っていったとしても、もしかしたら誰も来ないかもしれない。九番団地の二一ズに私たちがたまたまびったり合っていたから成功しているだけなので、私たちの活動を他の地域に広めたいとは全然思っていません。とにかく、九番団地の子どもたちや大人の方たちが、今日一日充実して過ごしてもらいたいという思いだけで活動していますので、あまりお手本にはならないかも知れないし、地域によっては、いい参考事例になるかも知れないと思っっています。ぜひまた遊びに来てください。

杉山 九番団地の方は委託事業なんかも受けているわけですね。

川口 そうです。そうでないとやっていけません。

杉山 場所があることで新しい展開ということも、もしかしたらあり得るかも知れないですね。高木さんいかがでしょうか。今日の話を受けてのご感想というか、県としての思いをちょっとお聞かせいただけませんか。

夢をエスコート

高木 個人的にはいろいろとやってあげたいんですけども、県もなかなか財政状況が苦しいので、今の段階では、「任せといて」という風にはなかなか言えないんですけども、ご期待に添えるようにはがんばっていきたく思っております。それと、夢ということなんですけれども、小学校、中学校の学齢期の年代の方については、日本語教室ですとか教育委員会がやっている加配教員とか、そういったことでできていますし、学齢期前の方は、プレスクールというって、小学校にスムーズに入って困らないような教室もやっているんですが、一番心配なのは、中学校を出ただけけれども、学校も行っていないし、それから就職もできないという方が増え

るのが一番嫌だなあという風に思っております。
県として、来年になるか、いつになるかわかりませんが、例と言ってはなんですが、カリンさんみたいにうまくいった方々を目標とするような形で、格好いい言い方ですが、若い方の夢を実現できるような、エスコートできるようなものを考えていきたいと思っております。

杉山 県もこれからどんどん努力をしてくださるといふことですので、「皆と一緒に夢をつかみましょう」というメッセージで今日は閉じさせていただいでよろしいでしょうか。どうも長い間ありがとうございました。



パネリストプロフィール

箱崎 カリン 氏（大学生）

豊田市保見団地在住の大学生。10歳の時にブラジルから来日

川口 祐有子 氏（NPOまなびや@KYUBAN代表）

名古屋市港区の外国人放課後学習支援教室「NPOまなびや@KYUBAN」代表

村上 アリセ 氏（外国人県民あいち会議代表）

平成22年度の外国人県民あいち会議代表。東浦町役場等の外国人相談員

高木 秀近 氏（愛知県多文化共生推進室主幹）

多文化共生作文コンクール優秀作品

【優秀賞（小学生の部）】

『みんな地球の子』

豊田市立西保見小学校 六年 許 恵眞

私は、韓国人。一年生のときに日本に来た。

私は、日本語もしゃべれず、友達もできなかった。私の名前は、「恵眞（へじん）。「神様から眞の恵をもらい、幸せになってほしい」と願いを込めてつけられた名前だ。その私の名前を男の子には、

「うわあ、へんじんだ！」

とからかわれて、とても悔しかった。でも、学校を休みたくはなかった。学校で楽しく過ごすためには、日本語が話せるようにならなければならぬと思った。私は、親の仕事の都合で日本に来た。また、韓国に戻れるのではなく、日本に住み続けるのだ。私は、日本で暮らすためには、勉強をがんばらなければいけないと思った。だから、私は、学校だけではなく、家でも本を使って、一生懸命に勉強した。日本語が話せるようになると、だんだんみんなが、私に近

づいてきてくれるような気がした。二年生には、学級委員にもなり、大きな仕事もできるようになった。親友もでき、学校が終わってから遊ぶようになった。

でも、やっとみんなと仲良くなれたと思った。また親の仕事の都合で転校することになった。それが、今の私の学校、西保見小学校だ。

西保見小学校には、外国の子がいっぱいいるということを知り、少しほっとした。そこに韓国人がいるかも知れないと思ったからだ。西保見小学校での一日目、私は、わくわくしながら学校へ行った。もちろん、どきどきもしていた。

教室に向かう時、すれ違った子が優しくあいさつしてくれた。私は、びっくりして、小さな声でしかあいさつが返せなかった。でも、その子は、私のあいさつを笑顔で受けとめてくれた。私は、この時、「きっと、この学校のみんなは、優しい！」と思った。私は、教室に入って自己紹介をした。周りを見てみると、すごくいろんな人がいた。目が青い人、かみの毛が茶色い人、背がすごく高い人、色の黒い人、白い人。私は、「こんなにいろいろな人と友達になれるのかなあ？」と思った。一時間目が終わった時、みんなが、「友達になろう！」「仲良くしてね。」と、

声をかけてくれた。私は、うれしかった。韓国人はいなかったけれど、残念ではなかった。みんなに、友達になろうと言ってくれる子がたくさんいるのだから。

私には日本人の親友がいる。彼女は、私の気持ちを考えながら話す。私は、自分の伝えたいことをストレートに伝えることが多い。韓国では、当たり前だが、言葉の伝え方が難しく、気持ちがすれ違い、けんかになった事もある。私も相手の気持ちを考えた言い方に気を付けてきた。今は、すれ違いもけんかも少なくなり、親友以上の友達になった。

学校の入り口には、「手をつなごうほくも私も地球の子」というスローガンがかかっている。確かにみんな少しずつ違うところもあるが、私も親友も、そして教室の仲間、みんなが地球の子なのだ。みんなが、仲良く笑顔で過ごせる西保見小学校は、私の自慢の学校だ。

【優秀賞（中学生の部）】

『国境のない友達』

みよし市立三好丘中学校 三年 山田 純里

「See you tomorrow」

私が日本に帰ってしまう日にモーラが言った言葉です。5年たった今でもこの日のことは鮮明に覚えています。

私にはモーラというアメリカ人の親友がいます。5歳のときに出会い、私の人生の中でおそらく初めて心から信頼できる友達となった人です。仲良くなつたきっかけは家が近所だったことです。アメリカはすごく近所付き合いがよかったですので、近所に住んでいる人たちだけで一月に一度は誰かの家のプールでパーティをしたり庭でバーベキューしたりしていました。引越してきてすぐの時も近所のみなのでパーティをやりそこでモーラと出会いました。

友達になってすぐの頃は私が英語をまだ全然喋れないので会話はあまり成り立っていませんでした。モーラと遊んでいると一時間に何度も150m程離れた自分の家に帰ってモーラが言っていた言葉がどういう意味かお母さんに聞いて、理解したらまた150m全力疾走してモーラの家に戻りました。そのため遊ぶ度に足が結構疲れていました。

私とモーラは学校も一緒でした。始めて学校へ行くまでは本当に未知の世界だったので不安で仕方ありませんでした。英語がまだほんの

少ししか喋れない私なんかみんなと仲良くしたり、一緒に勉強することなんてできるのかな…と行く前の日、悩んだのを覚えています。でも私の通っていた学校はメキシコやフランス、中国などいろんな国から来た人が多かったので始めの頃は「あつ日本人だ。」という目で見られました。数週間たつと他の子との壁もとれて仲良くすることができました。アメリカの学校は本当に自由で制服とかもなかったのです。それぞれの子の個性がとて強かったです。いろんなタイプの子がいるのでいろんな子と友達になり会話することができました。

アメリカの子たちと一緒にいて思ったことがあります。それはみんな自分の考えをしつかり持っていることです。思ったことはちゃんと口に出すし、何よりもみんな自分の夢というものがみんなしつかりと決まっていました。特にモーラはそうでした。いやなことがあるとはつきりと「いやだ」と言いますし、嬉しいことがあると「人間ってこんなに嬉しさを表現できるんだ。」と思うくらいすごく嬉しい顔をしています。そして自分の夢というものを持っていて、その夢に向かって日々努力していました。モーラのそういうところを私はとても尊敬していました。

モーラが一番いいところ、それは「フレンドリー」なところです。人見知りじゃなく、誰にでも「Hi」と気軽に話しかけちゃうような子です。それまで結構、人見知りだった私をモーラが変えてくれました。モーラと一緒にい

るといつも笑顔でいれたし、私自身もモーラと仲良くなったおかげで明るくなれた気がします。私が日本に帰ってしまう日、当日。私とモーラは至つて今までと変わらない普通な感じで別に泣くこともなくお別れをしました。でも最後に車に乗ってモーラの家を去るときモーラが私に向かつて、

「See you tomorrow」

と叫びました。明日からはもう当分会えないのにそうやって言ってくれたのがすごく嬉しくて、車の中でたくさん泣いたのを覚えています。モーラと離れ離れになって5年がたちます。

モーラは今高校生です。私たちは海を跨いで何千キロも離れた場所に住んでいます。でもいまでも手紙交換をしたり、メール交換をしていて信じられる大好きな親友です。

モーラと出会って、モーラに教えてもらったことがたくさんあります。それは、自分の意見ははっきり言うこと、人見知りをせず誰にでもフレンドリーに話しかけること、そして…友情には住んでいる国も人種も話す言語も関係ないと言うことです。

これからの生活の中で私はさまざまな性格のさまざまな人種の人に出会っていくと思います。そのときは日本人に対しても外国人に対しても積極的に話しかけ、たとえ言葉が通じなくても自分からコミュニケーションをとろうとしたりして、いろんな人と交流を深めていきたいです。

多文化共生フォーラムあいち 2010 記録集

発行

平成 23 年 1 月 25 日

愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室

〒460-8501

愛知県名古屋市中区三の丸 3-1-2

電話 052-954-6138

FAX 052-951-2590

E-mail tabunka@pref.aichi.lg.jp

あいち多文化共生ネット

<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html>